

人と社会を支える
「ずっと。」

溪仁会グループ

CSRLレポート2017

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT 2017



iK 溪仁会グループ

医療 溪仁会 社会福祉 溪仁会
法人 法人

株式会社ソーシャル 医療 稲生会
法人



【シンボルマークについて】

溪仁会の頭文字であるKをモチーフに、当グループの理念を表現しています。その形状は人と人の支え合いに基づいた「安心感と満足の提供」、勢いよく真っ直ぐに立ち上がるさまは「変革の精神」を表しています。ブルーのカラーリングは、「プロフェッショナル・マインド」および「信頼の確立」をひたむきに追求する、誠実さをイメージしています。

溪仁会グループ CSRレポート 2017

CORPORATE SOCIAL RESPONSIBILITY REPORT 2017



編集方針

溪仁会グループは、2006年から「CSRレポート」(CSR=Corporate Social Responsibility: 企業の社会的責任)を発行し、当グループの取り組みや考え方をお伝えしています。

2017年版では、社会的責任の国際規格であるISO26000を意識しながら、溪仁会グループが続けてきたCSR経営や活動を「より良いサービスのために」「地域の皆さまのために」「働きがいのある職場づくり」の3つのテーマでわかりやすく編集しています。また、CSR活動を支える職員の姿や声を通じて、組織の現在や社会的使命、今後の方向性につながるさまざまなプロジェクトを表しています。

第三者意見は、CSR分野に詳しい東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部教授で、日本経営倫理学会理事の荻野博司氏にお願いいたしました。ご協力いただいた皆さんの声は、当グループの今後の事業の在り方や活動内容の検証に役立て、CSR活動の新たな展望につなげたいと考えています。

報告の範囲

当グループの2016年度(2016年4月～2017年3月)の活動やデータを中心に、2015年度以前や2017年度以降の活動情報も記載しています。

バックナンバーについて

「CSRレポート」のバックナンバーおよび各病院・施設・事業の実績データを取載した「年次報告書」は、当グループのWebサイト上で公開しております。URL <http://www.keijinkai.com>

次回発行について

次回CSRレポートは、2018年11月を予定しています。

●発行
医療法人溪仁会 法人本部 2017年11月

●お問い合わせ先
医療法人溪仁会 法人本部
医療福祉連携部 広報課
〒006-0811
札幌市手稲区前田1条12丁目2番30号
溪仁会ビル3F
TEL 011-699-7500 FAX 011-699-7501
E-mail editor0110@keijinkai.or.jp

C O N T E N T S

溪仁会グループの組織と事業	P04
溪仁会グループの社会的使命	P06
溪仁会グループの事業理念	P07

巻頭特集

地域と手を携えながら新たな医療の姿を描く

札幌溪仁会リハビリテーション病院の挑戦	P08
---------------------	-----

溪仁会グループのCSR活動

Report2016	P12
------------	-----

第1章 より良いサービスのために	P14
------------------	-----

Column CSRの未来へ①	P25
-----------------	-----

ステークホルダーダイアログ

より良いサービスを実現するために ～患者さん、利用者さんの笑顔をめざして私たちがすべきこと～	P26
---	-----

第2章 地域の皆さまのために	P30
----------------	-----

それは一人ひとりが輝いてこそ	P40
----------------	-----

第3章 働きがいのある職場づくり	P42
------------------	-----

Column CSRの未来へ②	P51
-----------------	-----

環境への取り組み	P52
----------	-----

数字で読み解く溪仁会グループ	P54
----------------	-----

ISO26000対比表	P59
-------------	-----

TOP MESSAGE

人と社会を支え続けるという使命を果たし
「あるべきすがた」の実現をめざす

溪仁会グループ最高責任者 医療法人溪仁会 理事長 田中 繁道	P60
--------------------------------	-----

第三者意見	P62
-------	-----

医療・保健・福祉サービスの用語集	P63
------------------	-----

溪仁会グループマップ	P64
------------	-----

溪仁会グループ一覧	P66
-----------	-----

皆さまの安心を、 医療・保健・福祉から支えるために。

私たち溪仁会グループは、創立以来札幌市を中心に、
医療法人・社会福祉法人などを運営し、
地域の皆さんの医療、保健、福祉を支え続けてきました。
グループの各事業が相互に連携して切れ目なくサービスをつなぎ、
地域の皆さんの生涯にわたるさまざまな場面で、
健康と安心をサポートしています。

治療とケア

乳幼児から高齢者まで、最新医療技術と機器を備え、
総合医療を提供しています。

- 手稲溪仁会病院(手稲区)
- 手稲溪仁会クリニック(手稲区)
- 手稲家庭医療クリニック(手稲区)

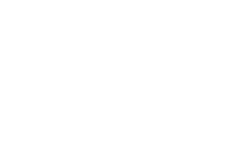
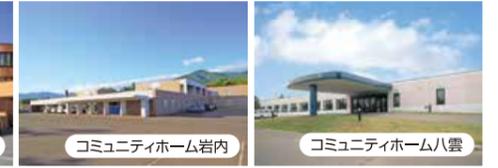


グループ全体が
シームレスにつながり
地域に根ざしたサービスを
提供していきます。

介護・社会復帰・生活支援 [入居支援]

住み慣れた家庭や地域で生活できるよう、介護・福祉のサービスを提供しています。

- 特別養護老人ホーム
 - ・西円山敬樹園(中央区)
 - ・月寒あさがおの郷(豊平区)
 - ・菊水こまちの郷(白石区)
- 介護老人保健施設
 - ・コミュニティホーム
- 軽費老人ホーム(ケアハウス)
 - ・カムビル西円山(中央区)
- グループホーム
 - ・西円山の丘(中央区)
 - ・白石の郷(白石区)



介護予防・生活支援・通所介護 [在宅支援]

病気や障がい等で介護が必要な方に、
専門のスタッフが日常生活をサポートいたします。

- 小規模多機能型居宅介護
- 地域包括支援センター
- 介護予防センター・介護予防サロン
- 通所介護(デイサービス)
- 認知症対応型通所介護(デイサービス)
- 指定居宅介護支援事業所
- 札幌市障がい者相談支援事業所・
札幌市障がい者住宅入居等支援事業所
- 訪問看護ステーション
- 訪問介護(ホームヘルパーステーション)



地域医療

公立診療所の指定管理者として、
地域の医療を支えています。

- 泊村立茅沼診療所(泊村)
- 喜茂別町立クリニック(喜茂別町)

リハビリと療養

看護・介護・リハビリテーションを
中心とした医療サービスを提供しています。

- 札幌溪仁会リハビリテーション病院(中央区)
- 札幌西円山病院(中央区)
- 定山溪病院(南区)

保健

病気の早期発見、健康管理、
予防に関するサービスを提供しています。

- 溪仁会円山クリニック(中央区)



身体障がい者支援

社会の中で生き生きと過ごせるよう、
障がいを抱えた小児患者さんを中心に
さまざまな面から支援を行います。

- 医療法人稲生会





溪仁会グループの 社会的使命

「ずーっと。」 人と社会を支える

私たち溪仁会グループは、
社会的責任(CSR)経営を推進します。
高い志と卓越した医療・保健・福祉サービスにより、
「一人ひとりの生涯にわたる安心」と
「地域社会の継続的な安心」を支えます。

2014年10月1日制定



溪仁会グループの事業理念

安心感と満足の提供

Offering a Sense of Security and Satisfaction

プロフェッショナル・ マインドの追求

Attaining a Professional Mind

信頼の確立

Building the Foundations of Trust

変革の精神

Developing the Spirit of Change

グループ経営の理念とその体系

私たち溪仁会グループは、「ずーっと。」を合言葉にCSR経営を推進してきました。この「ずーっと。」を具体的な理念として規定し、社会的責任をグループ全体で約束し、実現していくために、2014年10月1日に「溪仁会グループの社会的使命」を制定しました。医療・保健・福祉のサービスの質(公益性)を「人」、経営の質(継続性)を「社会」という言葉で表現しています。

「溪仁会グループの社会的使命」は、事業理念や各種達成目標の上位概念として、経営の根幹を成すものです。また、溪仁会マネジメントシステム(KMS、P51参照)を、私たちの活動全体を支え、CSR経営を確かなものにする取り組みとして位置づけています。

溪仁会
グループの
理念体系図



地域と手を携えながら新たな医療の姿を描く

札幌溪仁会リハビリテーション病院の挑戦

2017年6月1日、札幌市中央区の桑園地区に、溪仁会グループの新しい病院が誕生しました。

「札幌溪仁会リハビリテーション病院」は、急性期の治療が終わった患者さんへの回復期リハビリテーションに特化した病院です。

急性期医療と在宅復帰や慢性期医療をつなぐ病院として、質の高いリハビリテーション医療を提供するとともに、誰もが住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができる地域づくりにおいても、中核的な役割を果たそうとしています。



回復期から在宅での生活支援まで 地域を支える拠点となることをめざして

回復期リハビリテーションに取り組む意味

このたび、札幌溪仁会リハビリテーション病院が満を持して開院いたしました。2008年4月の札幌西門山病院の病棟再編計画を端緒に、新病院開設が検討されるようになり、2011年には溪仁会グループ全体の事業としたプロジェクトが始動。それ以来、医療ニーズや地域性のリサーチ、病院の理念や提供する医療の検討、地域との連携体制づくりなどを進めてきました。通算して9年という歳月を経て開院できたのは、当グループの職員をはじめ、地域住民や連携機関の皆さんのお力添えがあつてのことと、心より感謝申し上げます。

当病院は回復期機能に特化したリハビリテーション専門の病院です。国が推進している地域包括ケアシステムでは、医療や介護が

必要な状態になっても、住み慣れた地域で暮らし続けられる仕組みづくりをめざしていますが、そのためには切れ目なく医療や介護、福祉サービスが提供されなければなりません。しかし、高度急性期・急性期・回復期・在宅を含む慢性期という各ステージの医療のうち、回復期の病床は数が不足しており、札幌圏では2025年までに回復期リハビリテーション病床を6,700床増床する必要があると推計されています。このミッシングリンク(途切れている部分)を埋めるのが当病院の役割です。回復期リハビリテーション病棟2棟(96床)と、回復期を含めて広く患者さんを受け入れる一般病棟1棟(47床)を備え、急性期医療と在宅・慢性期医療の間をつなぐ機能を果たします。

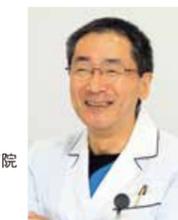
地域から頼りにされ、選ばれる病院となるために

開院時は回復期リハビリテーション病棟2棟からスタートしましたが、1カ月もたらずに満床となり、地域が抱えるニーズの多さをあらためて認識しました。当病院のような回復期機能を担う医療機関に求められるのが、急性期の治療を終えた患者さんを早く確実に受け入れる体制です。できる限り多くのニーズにお応えしようと、職員が一丸となりスピーディーな入院対応に努めています。9月には一般病棟がオープンし、より多様な患者さんの受け入れ体制も整いました。今後は一般病棟から地域包括ケア病棟への一部移行を視野に、地域のニーズにマッチした病棟の役割を見極めたいと考えています。

当病院は、地域包括ケアシステムの要となることを目標に、準備段階から地域の方々と交流を図ってきました。地域が抱える課題や

ニーズを理解し、誰もがその人らしく暮らすことのできるまちづくりに取り組んでいます。北海道の方言に、「仲間に入れる」を意味する「かでる」という言葉があります。桑園地区に「かでてもらった」仲間として、地域に開かれた病院をモットーに、今後も地域との結びつきを強めていきます。

私たちの願いは、選ばれる病院・頼られる病院になることです。充実したリハビリテーションや療養環境、温かなケアなど、サービスの質で選んでいただけるように実績を積み重ねています。また、将来構想として、在宅医療までを含めた幅広い生活支援にも取り組んでいきます。回復期リハビリテーションから在宅生活までを受け持つ体制を築き、地域の皆さんを支え続けていきたいと考えています。



札幌溪仁会
リハビリテーション病院
院長
横串 算敏

医療機関や地域との密接な連携で誰もが安心して暮らせるサポートを



札幌溪仁会
リハビリテーション病院
地域連携室 副室長
成田 亘

札幌溪仁会リハビリテーション病院は、急性期を中心とする医療機関とのスムーズな連携をめざしています。窓口の機能を果たす地域連携室の成田亘副室長は「当病院の地域連携室には、手稲溪仁会病院で急性期医療を経験した看護師が所属しています。急性期の治療を終えられた患者さんを迅速かつ的確に受け入れることができ、退院支援でも医療面のアドバイスなどを行っています」と支援体制の特徴を説明しています。連携対象の医療機関は同病院を中心にお

おむね半径5km圏内。その範囲内の主な急性期病院と個別に開院に向けて相談を進めてきたことで、入院の受け入れは順調に進みました。在宅復帰される方も多いため、今後は退院後のサポートにも力を入れています。

同病院は地域に開かれた病院として、地域との結びつきを重視しています。桑園地区は町内会や地域活動を展開するNPO法人など、しっかりとしたネットワークが形成されており、その一員となるため開院前から「桑

園交流ネットワーク」の活動に参加し、地域との連携を図ってきました。住民向けのイベントの企画や健康づくりの啓発事業など、地域の方々とかかわる場を設け、交流の促進に取り組んでいます。「地域の方々との見える関係を築き、信頼していただくのが目標。そのために積極的に情報発信をしていきたい」と成田副室長。住民の皆さんが安心して暮らすことができるまちづくりをめざして、地域とのコミュニケーションを続けていきます。



オープンロビーの上部に飾られたオブジェ「桑園のヴェレージ」は家々が集まる集落をイメージしてつくられました

専門的かつ先進的なリハビリテーションで 地域生活を支える医療・ケアを実現する

札幌溪仁会リハビリテーション病院は、地域に根ざした医療機関として、新たな取り組みに挑戦しています。
きめ細かなリハビリテーションやケアと最先端の技術を組み合わせ、質の高い医療を追求しています。

退院後の生活を見据えながら効率的で質の高い医療を提供

札幌溪仁会リハビリテーション病院は、多職種によるチームアプローチと最先端の機器を活用したリハビリテーションを中心に、一人ひとりの患者さんに最適な医療やケアを提供しています。回復期リハビリテーションの主な対象となるのは、脳血管疾患や大腿骨頸部骨折などの急性期治療を終えられた方です。早期に集中的なリハビリテーションを行うことで身体機能や生活機能を改善し、在宅復帰を支援します。また、一般病棟では急性期の治療を終えられた方のほか、ご自宅で療養されていて症状が悪化した方や生活機能が落ちた方などを受け入れ、ご自宅に戻ることができるように専門的なリハビリテーションを提供します。

同病院の医療の特徴は患者さんとご家族にもカンファレンス(症例検討会)に参加してもらい、チーム医療の一員としてかかわっていただくこと。コミュニケーションを図りながら、要望や課題などをともに考えることで、治療や在宅復帰への意欲を持っていただくようにしています。また、退院してご自宅に戻られてから3か月後の状態までを見据え、効果的な治療やリハビリテーションを実施するために「リハビリテーションパス」*を導入。橋本茂樹副院長は「退院して終わりではなく、その後の地域での社会参加までを視野に入れた医療に

取り組みたい」と目標を話します。
同病院がめざすのは、地域のネットワークの一員となり、新しい医療の姿を描くことです。「地域に貢献しながら在宅に戻る患者さんの生活の質を向上させると同時に、働くスタッフにとっても夢を実現できる病院でありたい」と橋本副院長はビジョンを語っています。



札幌溪仁会
リハビリテーション病院
副院長
橋本 茂樹



北海道最大級の2階リハビリテーション室。このほかに各病棟にもリハビリテーション室が設けられています

1階に診察室と検査室、2階にリハビリテーション室、3～5階に病棟を配置。木の温もりを活かした心安らく環境になっています

*治療や検査などの内容や流れをスケジュール表としてまとめた「クリニカルパス」のリハビリテーション版

機能的に多職種連携を図り在宅復帰と生活の質の向上を支援

同病院で気づくのは、医師から事務スタッフまで、全員が同じユニフォームを身につけていることです。これは、すべてのスタッフが同じ立場で、同じ思いを共有しながら患者さんの治療に臨もうという同病院のポリシーを表しています。さらに病棟の責任者であるマネジャーにリハビリテーションスタッフを加えるなど、医療とケアのよりスムーズな提供に向けた体制づくりに取り組んでいます。そのために大切にしているのが多職種連携です。森河琴美看護・介護部長は

「多職種連携をより機能的なものにするため、病棟の管理や勤務体制、情報共有の在り方などを含めて、新たな仕組みづくりを考えています。どんな小さなことでも相談できる風通しの良い環境にするのが目標です」と話します。

患者さんが在宅復帰をされたとき、病院での生活とのギャップをできるだけ減らすために、療養環境にもさまざまな工夫をしています。リハビリテーションではご自宅での暮らしと同様に、ベッドで食事をしないこと。また排せつはトイレで行うことを基本にしています。そのため、病棟のトイレや洗面台は患者さんが利用しやすい配置にしました。あわせて患者さんの自立度に合わせた多機能な浴室やプライベートスペースに配慮した病室など、生活シーンに対応した環境を整えました。患者さんの自立を支援し、生活の質を高めることで、在宅復帰後も安心して生活できるようにサポートします。



札幌溪仁会
リハビリテーション病院
看護・介護部 部長
森河 琴美



ゆったりとベッドを配置し、プライバシーにも配慮した4人部屋

すべてのスタッフが同じユニフォームを着用し、チームとして患者さんにかかわっています

最先端のリハビリテーションに取り組み、地域の期待に応えていきます

当病院のリハビリテーションスタッフは、病棟・外来部門と訪問部門をあわせて72名(2017年9月1日現在)です。患者さん1人を複数のスタッフが担当するチーム制を導入し、常に質の高いリハビリテーションを提供できるようにしています。

当病院に入院される患者さんの多くが在宅復帰をめざされています。ご自宅での生活を見据えたリハビリテーションを提供するために、患者さんが入院された早い段階でご自宅を訪問し、生活環境を確認しています。この調査をもとにリハビリテーションの到達目標を設定し、身体・生活機能の回復をはじめとした幅広い支援を行います。

自慢は充実したリハビリテーション環境です。近年はITやロボット技術などを活用したリハビリテーション機器の開発が進んでいます。当病院では道内でも数少ない最先端の機器を導入し、より効果的なリハビリテーションを提供しています。患者さんからの期待も大きく、入院中にできるだけ機能を引き上げ、在宅

に復帰していただくようにしています。

リハビリテーション部では、入院患者さんが楽しく体を動かす機会をつくらうと、オリジナルの「まるべりい*体操」を考案しました。各病棟で毎日20分間、スタッフも参加して体操を行っています。呼吸法やヨガの要素も取り入れた実践的な内容になっており、今後は健康づくりの一環として地域にもこの体操を広めていきたいと思えます。

将来の夢は、当病院を日本を代表するリハビリテーション病院にすること。スタッフたちと目標や問題意識を共有しながら技能のレベルアップを図り、夢を実現したいと考えています。

*英語で「桑の実(mulberry)」の意味



札幌溪仁会
リハビリテーション病院
リハビリテーション部
部長

佐藤 義文

テクノロジーを活用した最新のリハビリテーション機器



マイオブレッシャー・マイオモーション

身体に取り付けたセンサーで動きを3次元情報として読み取り、コンピュータで解析する装置。リハビリテーションの効果を速やかに評価できます



コグニバイク

ペダルをこぎながら計算問題などを解いて頭も使うことで、運動と認知課題を同時にこなす、認知症ケアを目的とした訓練器具



マルチパラレルバー

歩行レベルに合わせて坂道や障害物など、さまざまな条件を設定して歩行訓練を行うことができます



バイオニックレグ

足を動かそうとするわずかな動きをフットセンサーが読み取り動作をサポートする最先端のリハビリテーションロボット



■病院概要

名称：札幌溪仁会リハビリテーション病院
所在地：札幌市中央区北10条西17丁目36番13号
電話：011-640-7012
病床数：回復期リハビリテーション病棟96床
一般病棟47床(一部地域包括ケア病棟に移行予定)
診療科目：リハビリテーション科/内科
併設事業：通所リハビリテーション/訪問リハビリテーション/訪問診療/居宅支援事業

Report 2016

溪仁会グループの使命は地域社会と、そこに住む皆さんに安心を届け続けることです。それは、私たちの本業である医療、保健、福祉事業において、質の高いサービスを追求することであり、それには地域からの期待やニーズを捉えて応えていくこと、職員一人ひとりがプロフェッショナルとして活躍できる組織であることが必要です。それらを実現するために3つのテーマを設け、私たちはCSR活動を続けていきます。

第1章 より良いサービスのために

溪仁会グループが第一に求められることは、医療、保健、福祉サービスを利用される患者さんや利用者さんに、最高の品質のサービスを提供することです。地域をリードする技術の向上と革新を続け、それを可能とするチームワークの体制を築くこと、職員一人ひとりがサービスの品質向上に努めることで、患者さんや利用者さんの満足度を高めることをめざします。また、その活動が誰かの不利益とならないよう、患者さんや利用者さんをはじめ事業にかかわるすべての方の権利を尊重し、公正な活動を行っています。



P14

第2章 地域の皆さまのために

溪仁会グループのすべての病院・施設そして職員は地域社会の一員であり、その活動は地域やそのコミュニティの発展のためにあるものです。溪仁会グループとその施設が地域に開かれ、地域に根ざすサービスを行えるように、地域の皆さんとの対話やコミュニケーションの機会を重視しています。また、地域の皆さんに医療、保健、福祉について理解を深めていただくため、さまざまな情報提供の機会をつくっています。



P30

第3章 働きがいのある職場づくり

溪仁会グループが質の高いサービスを実現するためには、職員一人ひとりが自分の職務や所属する職場に誇りを感じ、責任を持って職務に臨まなければいけません。職員それぞれがプロフェッショナルとしてキャリアアップできる教育研修の機会を整え、組織としても向上を続ける職場づくりを行っています。さらに一人ひとりの個性を尊重し、ワーク・ライフ・バランスの整った働き方を実現するほか、健康管理や福利厚生にも力を入れています。



P42

より良いサービスのために

溪仁会グループの質の高いサービスは職員一人ひとりの強い使命感や温かな心、高い志によって支えられています。より良いサービスをめざして挑戦を続ける溪仁会グループの取り組みをご紹介します。

Human Story 1

リスクのある出産を支えるのが自分たちの責任。 子どもと母親に向き合い、心を大切にする医療を。

妊娠期から出産後まで赤ちゃんを母親を支える周産期医療。特にリスクの高い出産や母親が何らかの疾患を抱えているような場合は、高度な専門医療によるケアが求められます。

手稲溪仁会病院はNICU(新生児特定集中治療室)やGCU(継続保育室)を備え、産科医療と新生児医療に対応した高度な医療を提供する地域周産期母子医療センターに指定されています。2016年10月には「母子はぐくみセンター」を開設し、生まれてくる生命と母親を守る周産期医療に取り組んでいます。日本小児科学会専門医であり、センター長を務める岩田正道医師は「強みは新生児の疾患だけでなく、母親の内科診療まで対応ができること。小児科医、産婦人科医を中心に、チーム医療を行っています」と同センターの特徴を説明します。

岩田センター長が小児科を志したきっかけは、学生時代の英語塾でのアルバイトでした。「子どもたちの心は正直。そこをしっかり向き合ってみようと思いました」。大学を卒業後、道内の病院を回り小児科医としての経験を積む中で、岩田センター長は新生児医療に心を惹かれていきました。生まれた赤ちゃんに重度の疾患が見つければ何日も付き添って治療にあたり、必死に生命を救おうとする先輩医

師たちの姿を見るうちに、岩田センター長は新生児医療を専門にしようと決めていました。

日本では約1割の出産にリスクがあるとされており、「その1割を受け入れるのが当センターの責任」と岩田センター長は言います。出産の前から小児科医がかかわることで、胎児の心臓疾患などを早期に発見でき、重度の障がいにも万全の体制で備えることが可能になっています。また、母親の甲状腺の疾患や高血圧などに対しても、それぞれの診療科と連携したサポート体制が整っています。小樽市からもリスクのある妊婦さんの受け入れを行うなど、近隣の市町村を含めた広域の周産期医療を支える拠点として、同センターは不可欠な存在となっています。

「これからは若い医師に自分の経験から得たことを伝えていきたい」と目標を話す岩田センター長。「小さいお子さんは小児科医に治療してもらったことは忘れるかもしれませんが、それでいいのです。子どもの内科診療をすべて受け持ち、病気を発見するのが小児科医の役割。この仕事に誇りを持っています」という言葉から、子どもたちへの深い愛情と医師としての使命感が伝わってきました。

手稲溪仁会病院
母子はぐくみセンター
センター長
岩田 正道



Human Story 2

患者さんの思いや背景にあるものを共有しながら 次の生活に向けたケアをめざしています。

急性期の治療が終わり、病状が安定した患者さんに対して在宅復帰を支援するための医療や看護、リハビリテーションの提供を目的に、2014年から新設されたのが地域包括ケア病棟です。定山溪病院では2016年11月に地域包括ケア病棟40床を開設し、専任の看護師やリハビリテーションスタッフなどが連携しながら、こまやかなケアを提供しています。

地域包括ケア病棟を担当する梅津光香師長は、急性期病院などを経て2009年に同病院に入職。「慢性期病院という環境で、これまでの経験を活かして何ができるのか、何を感じるのかということに興味がありました」と当時の思いを振り返ります。慢性期医療という新たな分野で活動し、師長も務める中で、新設の地域包括ケア病棟を任されることになりましたが、亜急性期分野での看護経験もあったことから、大きな戸惑いはなく職務に就きました。

地域包括ケア病棟には60日間以内という入院期間があり、患者さんの入院から退院までの動きがスピーディーになります。慢性期とは異なる対応が必要なため、マニュアルの見直しやスタッフの学習会などを行い、開設に備えました。

開設後に梅津師長が驚いたのがスタッフの意識の変化でした。「患者さんが退院までに何をめざすのかを常に意識するようになり、自宅に戻られてからの生活までイメージしたケアを行えるようになりました。入院初期から積極的に働きかけることで、患者さんの回復にも効果が見られました」

地域包括ケア病棟には、さまざまな疾患の方、異なる背景を持つ方が入院されています。急性期病院からの転院、自宅や施設からの入院が約半々。認知度が上がったことで、ケアプランセンターからの

紹介も増えてきました。最大の特徴は「患者さんを選ばないという姿勢」だと梅津師長は言います。「患者さんの尊厳」「病気ではなくその人を見る」という定山溪病院の医療への信念のもとで、患者さんやご家族の心に寄り添い、要望や生活状況に合わせた柔軟な対応心がけています。

「この病棟にはさまざまな方が入院されていて、それぞれに違うアプローチが必要です。学ぶことが多く、新しいチャレンジができるのが楽しい」と笑う梅津師長。「患者さんがその人らしく生きるためのお手伝い」という看護の仕事への喜びと誇りを胸に、みんなが笑顔になるケアを追求しています。



定山溪病院
地域包括ケア病棟
師長
梅津 光香



専門性の高い認知症ケアの実現をめざして

認知症になる方が増えるなか、溪仁会グループではより専門性の高いケアや支援を行うことで、その方の健康状態や生活の質の向上につなげる活動を重視しています。患者さんや利用者さん、そしてご家族を支える取り組みをご紹介します。

Subject 1

認知症を併発する患者さんの身体の疾患に対し適切なケアを行う

患者さんの療養生活を支える認知症ケアチーム



精神科専門医、認知症看護認定看護師、医療ソーシャルワーカーからなる認知症ケアチーム

札幌西円山病院は長期間入院される高齢の患者さんが多く、身体の疾患の治療を目的とした入院であっても、認知症を併発したり、入院のストレスなどで認知機能が低下したりする場合があります。認知症の患者さんの症状を把握し、適切に対応することで、スムーズに身体疾患の治療を受けられるようにサポートするのが認知症ケアチームです。同病院では2016年10月から活動を始め、病棟と連携しながら認知症ケアの向上に努めています。

構成メンバーは、精神科専門医の宇野学医長と、認知症看護認定看護師の白川由美看護師、医療ソーシャルワーカーの駒形成美さんの3名。週1回のカンファレンスや全病棟のラウンド(見回り)を実施して、認知症の患者さんの状況を把握し、必要に応じて看護計



画の見直しやケアのアドバイスなどを行います。宇野医長は「現在、当チームが対象にしている入院患者さんは300名ほど。新たに認知症の方が入院されるときは、なるべく早くラウンドを行うようにしています。認知症の患者さんは環境変化によるストレスで、幻覚や徘徊などが起きやすくなるため、適切な薬の使用なども含めてアドバイスをしています」と現在の活動を説明します。

同チームが始動したことで、各病棟では認知症への対応を相談できるようになり、特に重度なケースは同チームが迅速にかかわるようにしているため、スタッフが安心して患者さんのケアに臨めるようになりました。また年に3回、院内での「認知症ケア研修会」を実施し、認知症ケアの底上げに取り組んでいく予定です。

現在は入院患者さんへの対応が中心ですが、今後はさらに活動の範囲を広げ、退院後の生活も視野に入れた支援やご家族へのサポートなどを行っていくことも目標としています。「どのような症状を抱える患者さんでも、その人の心の在り方を尊重して対応していくことが大切」と宇野医長が語るように認知症患者さんの心身を支える活動が続きます。



札幌西円山病院 医長
宇野 学

●認知症ケアチーム

認知症に精通した多職種が協働し、認知症患者さんの療養環境向上やほかの医療スタッフのサポートに当たるチームで「Demencia(認知症) Care Team」の頭文字を取ってDCTともいいます。認知症患者の診療に十分な経験と知識のある医師、看護師、認知症患者の退院調整経験のある社会福祉士または精神保健福祉士を中心に構成されます。

●認知症看護認定看護師

認定看護師は、21の看護分野について、専門的知識と熟練した看護技術を有することが認められた看護師です。認知症看護認定看護師は、認知症の各期に応じた療養環境の調整やケア体制の構築、行動心理症状の緩和・予防などに関する知識・技術を有します。

Subject 2

専門的な知識を学び、より早期に集中的な認知症への支援を実現する

認知症支援の知識を深め早期の適切な対応を図る

認知症の利用者さんやそのご家族を支援する際、認知症の専門的な知識を持って対応することで、より早く、適切なサービスにつなげることができます。溪仁会グループでは内部・外部研修を含めて、認知症についてのさまざまな研修の機会を設け、職員の対応力向上を図っています。

札幌市白石区第1地域包括支援センター*の佐藤友里江主任は、2017年7月に「認知症初期集中支援チーム員研修」を受講し、認知症の方への早期のかかわりによる具体的な事例や支援方法などを学びました。「認知症初期集中支援チームは6カ月間で支援について道筋をつくり、早期診断・早期対応をめざします。最初は、そ



札幌市白石区 第1地域包括支援センター 主任
佐藤 友里江

んなに短い期間で完結できるのだろうか、と思っていましたが、統計では訪問相談が5回以下、平均64日以内に適切な医療やケアにつなげていることを知り、多職種と連携したチームでかかわることの重要性を実感しました」と研修での学びを振り返ります。

2017年4月には実際に初期段階からのかわり事例を経験し、2カ月程度で精神科の受

診につなげることができました。「この経験があったことで、研修の内容を深く理解できました。具体的な支援のプロセスを確認できたこともメリットでした」

認知症の方への対応は、症状が進んでしまったり、ご家族が疲弊する前に支援につなげることが大切です。早期に症状に気づくことと早期に支援を行うことが重要になると佐藤主任は言います。今後は研修で得た知識を周囲にも伝えとともに、認知症初期集中支援チームの活動を広く知ってもらい、早期対応を働きかけていくことも目標としています。*札幌市から社会福祉法人溪仁会への運営委託

●認知症初期集中支援チーム

認知症になっても住み慣れた地域で暮らし続けられるように、認知症の方やそのご家族と早期にかかわり、早期診断・早期対応に向けて支援するチーム。専門医と医療・介護の専門職で構成され、認知症もしくは認知症が疑われる方やそのご家族を訪問して、適切な医療やケアを受けられるように支援を集中的(おおむね6カ月間)に行います。

その他の取り組み

Subject 3

認知症患者さんやご家族が情報交換できる場所を

認知症カフェの開催

認知症カフェとは、認知症の方やご家族、地域の方々、医療・介護・福祉の専門職など誰もが集うことができる場所で、認知症に関する相談や情報交換のほか、地域交流の機会となります。札幌西円山病院では2014年から認知症カフェ「スマイルカフェ」を月1回開催しています。2016年10月からは、毎月第2水曜日にコミュニティホーム白石でも「レモンカフェコミ白」を開始。2017年度からは菊水こまちの郷でも開始しています。

コミュニティホーム白石での「レモンカフェコミ白」開催の様子



Subject 4

認知症への理解を地域に広げ、助け合う環境へ

認知症サポーター養成講座

認知症を正しく理解し、地域の認知症の方やご家族をできる範囲で支援する「認知症サポーター」の養成が全国で進められています。溪仁会グループでは、認知症サポーター養成講座を開催し、職員やその家族、地域の方々の認知症サポーター養成を進めています。特に開催に力を入れているのが札幌西円山病院と手稲つむぎの杜で、札幌西円山病院で785名、手稲つむぎの杜で301名の認知症サポーターを養成しました。

■2016年度開催回数

札幌西円山病院	19回
手稲つむぎの杜	11回
コミュニティホーム白石	2回
岩内町地域包括支援センター	5回
カームヒル西円山	1回

Action 地域の中核病院として信頼を高める手稲溪仁会病院の取り組み
[手稲溪仁会病院]

Challenge 高度急性期病院として、より高度な医療機能の追求と療養環境の向上をめざす

Action 患者さんにとってより便利で安心できる環境・サポート体制の整備

手稲溪仁会病院では、高度医療提供体制をハード・ソフト両面から実現する「Tプロジェクト」を進めてきました。プロジェクトの中心となる新棟（F棟）の稼働開始以降は、高度先進医療への対応と療養環境向上に向けた整備を進めています。

2016年度は、7月末に産科がF棟の5階へ移動し、F棟すべての病棟が稼働を開始しました。また、NICUの移転、ICUを16床に増床、E棟の5階にあった内科の病棟をSCUに改修するなど機能を強化しています。さらに、地域がん診療連携拠点病院としてがんの早期発見に力を入れるため、気軽に受診できるがん検診を開始。現在までに10種類の検診を揃え、実施日・時間も受けやすいよう拡大しています。

また、診療科が多く複雑な病院の中で、患者さんに快適に診

療を受けていただくための取り組みも進めています。10月3日には、患者サポートセンター（PSC）が病院正面玄関付近に新設されました。看護師・薬剤師・管理栄養士・医療ソーシャルワーカーなどの各職種が配置され、患者さんは入院受付、術前・検査のサポート、退院支援、医療・福祉・がんなどの各種相談といったサービスを1カ所で受けられるようになりました。11月1日にはD棟4階に、憩いの場となる院内レストラン「ひだまり」がオープンしています。

2017年6月をもって改修工事を伴うプロジェクトはすべて終了しました。今後も地域、そして北海道の高度医療を支えていく役割を担えるよう、質の高い医療提供を続けていきます。

入院前に総合的な支援を行う「術前サポート」～患者サポートセンターの活動～



手稲溪仁会病院
看護部 部長
澤田 小百合

高度な術式を含め、年間7,800件超の手術が行われる手稲溪仁会病院では、手術に臨む患者さんの支援も重要な課題の一つでした。患者サポートセンター開設により、看護師を中心とした多職種による術前サポートの強化が可能となりました。

「以前は外来で手術の説明を行っていましたが、外来受診の時間内では患者さんが抱える不安や疑問を解消しきれないこともありました。また入院前に止めるはずの薬を飲んでしまい、手術が延期になるケースもありました。外来から入院、退院までさまざまな説明が別々に行われると、患者さんが同じことを質問される機会も増えてしまいます。その説明を1カ所に集約することで、効率的で手厚いサポートを可能としました」と術前サポートを担当する澤田小百合師長は説明します。

手術が決まった患者さんは、外来受診後に患者サポートセンターを訪れます。そこで手術までの流れや、受ける手術について記載されたパンフレット2冊を受け取り、看護師、薬剤師、管理栄養士、医療ソーシャルワーカーから順番に説明を受けます。

「術前サポートを行った患者さんについては、薬トラブルなど術前の理解不足による手術延期はなくなりました。また、患者さんが心

配ごとや疑問を話しやすい環境をつくったことで、背景となる生活上の問題を福祉相談につなげたり、認知症などの精神的な疾患の兆候を見つけ認定看護師に対応を依頼したりすることもできています」と澤田師長はメリットを語ります。

術前サポートは2015年6月に導入され、患者サポートセンター開設により本格化。現在は約40種類の手術で行われています。「2016年度はオープンして2カ月で約50件でしたが、体制が整った現在は月に200名近い方の支援をしています。時間のやりくりの難しさはありますが、工夫しながらご満足いただけるサポートを続けたいですね」と澤田師長はこまやかな支援を追求し続けています。



術前サポートは個室で実施。患者さんに気兼ねなくどんな質問でもしていただけるよう、やわらかい雰囲気で行っています

Next Step 医療技術の進歩に対応しながら、一人ひとりの患者さんへの手厚い支援をめざす

Action 専門的な診療機能高める札幌西円山病院の取り組み
[札幌西円山病院]

Challenge 1 神経内科医療とリハビリテーション医療の機能強化で優位性を発揮する

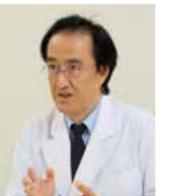
Action 神経内科医療とリハビリテーションによる高度なケアを提供

脳や末梢神経、脊髄などに何らかの病的変異が生じると、手足のしびれや筋力低下、めまいやふらつきといったさまざまな症状が引き起こされます。完治が困難とされることもある神経内科領域の疾患について、患者さんの病態から生活背景までを含めて「総合的に診る」のが、札幌西円山病院に2016年4月に開設された神経内科総合医療センターです。

同センターには、神経内科の専門医5名を含む医師8名が在籍し、専門的な診療を行っています。特徴的なのは、神経内科の診療（診断と治療）とリハビリテーションを組み合わせた総合的な医療を提供していること。病気の原因を究明し治療を行う臨床手技と、患者さんの抱える問題や不便を把握し解決をめざすリハビリテーションが、両輪となって機能することで、質の高い医療を実現しています。神経内科総合医療センターでリハビリテーションの診療を担当する小林信義医師は「これまでも長期入院される神経難病の患者さんはいましたが、当センターができたことによって、治療とリハビリテーションを有効に提供できるようになり、ご自宅に戻っていただくことも可能になりました」と話します。

同病院はこれまでも、リハビリテーション医療の強化に取り組んできました。小林医師は、院内にリハビリテーションセンターがあることに大きな意義があると言います。「神経内科の疾患を抱える患者さんにとって、専門的な治療とリハビリテーションを一つの病院で完結できるメリットは大きい。これが当病院の強みになっていると思います」

神経内科総合医療センターの開設から1年半が過ぎ、外来の患者さんも着実に増えています。治療とリハビリテーションの融合という特性を活かし、神経内科医療の先進的な拠点をめざしています。



札幌西円山病院
リハビリテーション
センター長
医師 **小林 信義**



神経内科医療とリハビリテーション医療を総合的に提供しています

Next Step 治療とリハビリテーションの効果的な提供でご自宅に戻る患者さんを増やす

Challenge 2 医療ニーズの変化にあわせて外来診療や病棟の機能を向上させる

Action 検査機器の導入や病棟改修で充実した医療を

札幌西円山病院では医療の質の向上をめざし、2012年より「Nプロジェクト」のもとで、病棟の改修や医療機器の導入、病棟機能の強化などに取り組んでいます。

従来は高齢者医療や慢性期医療を中心に提供してきました。近年は地域の医療ニーズの変化にあわせて、外来診療にも力を入れています。2016年は神経内科総合医療センターの開設に伴い、新たにMRI装置や全身骨密度測定装置などを導入。外来患者さんがより安全に充実した診療を受けられるようになりました。また、病棟の改修工事は2017年10月に完了し、

快適な療養環境が整備されました。

今後も地域からのニーズに応え、信頼される医療を実現するために、医療サービスの質向上や各部門の機能強化に努めていきます。



MRI装置や全身骨密度測定装置など、新たな検査機器を導入

Next Step ソフト面、ハード面の強化を続け、新しい病院の姿を示していく

Action 地域に密着した質の高い慢性期医療・ケアをめざす定山溪病院の取り組み
[定山溪病院]

Challenge 1 介護職員が自立的にやりがいを持って働くことができる環境づくり

Action 病棟で活躍する介護職員を育成し、より良いケアを実現

患者さんの身体ケアにおいて重要な役割を果たすのが、介護職員(ケアワーカー)の存在です。定山溪病院では、現在約100名の介護職員が在籍し、病棟でのきめ細かなケアを提供しています。2016年には、介護職員のサービスの質を向上させるために独自のワーキンググループ「ハートフルCCW*の会」を立ち上げ、業務の改善やスキルアップに取り組んでいます。

ハートフルCCWの会は介護福祉士の国家資格を持つ職員11名で構成されています。月に1回、看護副部長を交えて会議を行い、業務の課題や改善方法などを話し合っています。リーダーを務める大森祥子さんは、「それまでは病棟ごとにケアの方法が違う上、介護職員が気づいたことがあっても、問題提起をできる場がありませんでした。この会ができたことで、さまざまな課題が集約でき、より良いケアや解決策をみんなで考えられるようになりました」と活動の成果を話します。



定山溪病院
看護部
介護福祉士
大森 祥子

同病院では介護職員の教育にも力を入れています。新入職員は新人教育プロ

ラムと介護マニュアルによって、1年間でステップアップできるように工夫しました。また、院内研修による基礎的な技術の見直しや、院外研修に参加して新たな知識を学ぶ機会も多く、国家資格の取得など、キャリアアップをめざす職員が増えています。

2016年に地域包括ケア病棟が開設されたことに伴い、求められる介護の内容も変化しています。「患者さんと接する場面の多い介護職員だからこそできること、気づけることがある」と会のメンバーは声を揃えます。他の職種ともコミュニケーションを図りながら、患者さんにとって最善のケアを実現するために活動しています。

*CCW=Certified Care Worker(介護福祉士)



ハートフルCCWの会では定期的に会議を開催しサービスの向上を図っています。右から大森さん、国井明美さん、牧有佳さん

Next Step ハートフルCCWの会の活動を院内に周知し、他職種との連携を進める

Challenge 2 地域で暮らす高齢者が増え、訪問診療を必要とする人が増加

Action ご自宅で暮らす方への訪問診療を拡充

ご自宅や施設で生活を送りながら、訪問による医療的なケアを受ける患者さんが増えています。定山溪病院は、以前から訪問リハビリテーションを提供してきましたが、近年、特にニーズが高まっているのが訪問診療です。定山溪病院では医師4名と歯科医師1名が訪問診療を担当しています。

訪問診療は、医師が患者さんの生活の場にかがいが、リハビリテーションや薬の必要性の有無、身体状況の確認などを行います。移動の負担がなく、医師の診察が受けられるため、グループホームなどからの依頼も増えています。また、地域包括ケア病

棟が開設され、専門的な医療が必要になった患者さんを受け入れる体制が備わったことも安心感につながっています。今後も在宅サービスを強化し、地域で暮らす方々を支える活動に取り組んでいきます。

■定山溪病院在宅サービス 2016年度実績

	登録者数(名)	延べ数(回)
訪問診療	741	1,344
訪問歯科	62	209
訪問リハビリテーション	940	5,989

Next Step 埋もれているニーズを捉え、在宅サービスの強化に取り組む

Action 働く人々の健康を支える溪仁会円山クリニックの取り組み
[溪仁会円山クリニック]

Challenge ストレスに悩む人が増え、メンタルヘルスの不調を未然に防ぐ取り組みが必要に

Action 心の状態を把握し、サポートするストレスチェックへの対応

企業のストレスチェックをトータルでサポートできる体制

社会の多様化など、さまざまな要因から心にストレスを抱える人が増えています。「労働安全衛生法」の改正によって、2015年の12月から労働者が50人以上いる事業所に年1回のストレスチェックが義務付けられました。

ストレスチェックは本人のストレス状態がわかるだけでなく、高いストレス状態にあると判定されると、希望者は医師との面接を受けることができます。面接後は医師から事業者に対して意見書が作成され、必要に応じて就業上の対応などの意見を伝えます。

溪仁会円山クリニックは以前から、依頼された事業所の職員に健康への専門的な指導・助言を行う産業医活動に取り組んできた実績があり、産業医契約を結ぶ企業に対してストレスチェックのサービスを提供しています。ストレスチェックを担当する保健事業部保健指導科の米谷主任は、「ストレスチェックを実施する企業は、事前に社内規定づくりや安全衛生委員会の設立などが必要なため、『どうしてもいいのかわからない』という相談も多く、一からお手伝いすることもあります。ストレスチェック制度を理解してもらうため、企業の担当者を対象に「産業保健セミナー」を開催しました。また、産業医契約を結ぶ企業で未実施のところには、導入の提案を行うようにしています。そのほか、



調査票の質問は10分程度で答えられる内容です



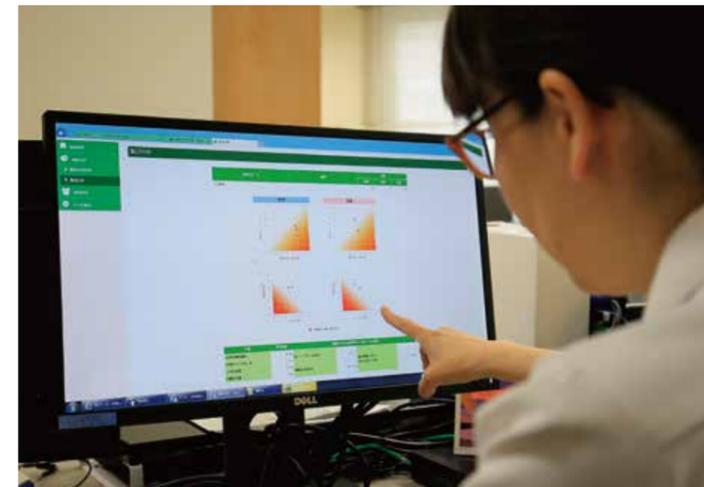
溪仁会円山クリニック
保健事業部
保健指導科 主任
米谷 美智子

メンタルヘルスに関するセミナーや、ストレスチェックの集団分析結果を職場のストレス対策に活かしてもらう取り組みなども実施しています。当クリニックは導入前の準備から産業医の面接まで、トータルで対応できるのが特長です」と言います。また、健診施設でもあるので、健康診断とストレスチェックを両方提供でき、心と体の両面をサポートできます。

安心して受けられるストレスチェックを提供していくために

現在、ストレスチェックを契約している企業は29社、対象者は4,500名程度。産業医の面接のみを契約している企業が15社あります。産業医契約のみを結んでいる30社に対しては、面接の希望があれば対応することになっていますが、今後はストレスチェックもあわせて導入する企業が増える、と米谷主任は予想します。

今後は増加する需要にも対応していくことが課題となります。実施後のアフターフォローなど、医師の面接を含めて利用しやすい仕組みづくりも目標にしています。企業や働く人々から「安心」と言ってもらえるように、柔軟な体制でメンタルヘルスの向上に取り組んでいます。



Webによる調査にも対応。集団分析の結果は職場環境の改善などに活用されます

Next Step 需要の増加に対応しながら、アフターフォローも充実させていく

Action **切れ目のないケアで在宅療養の安心を支える取り組み**
[家庭医療センター]

Challenge 1 在宅医療を提供するだけでなく、地域の体制づくりを進めることも必要

Action **在宅医療を推進する手稲家庭医療クリニックの取り組み**

質向上をめざし在宅医療のスタッフを強化

手稲家庭医療クリニックは、2009年の開院当初から地域のニーズに応える医療として、在宅医療に取り組んできました。訪問専任の医師や看護師、医療ソーシャルワーカーの配置を進め、徐々に規模を拡大。現在は札幌市全域、石狩市、小樽市の一部を含む地域で患者さんを診療しており、末期がんや神経難病、慢性期疾患、終末期といった幅広い症例に対応しています。また、在宅看取りに関しても実績は年々増え、2016年度は47件となりました。

さらにチーム力で診療機能を高めて地域の期待に応えるため、昨年度から皮膚・排泄ケア認定看護師、糖尿病療養指導士を加えました。現在、施設内での「在宅褥瘡対策チーム」「糖尿病ケアチーム」の組織化の準備にかかっています。

地域に在宅医療を定着させる啓発活動

近年では、さまざまな形で医療と結びつかなかった患者さんを、行政や保健師、あるいは直接の相談を経て訪問診療につなげるケースも増えています。

そこで地域の方々をはじめ、医療や福祉の関係機関を含め、



札幌市介護支援専門員連絡協議会 手稲支部との合同研修会



手稲区在宅ケア連絡会での研修の様子

在宅医療を啓発する活動にも力を入れています。2016年度は札幌市医師会依頼の住民講演、医師向け講演・研修、札幌市介護支援専門員連絡協議会や手稲区グループホーム管理者連絡会の依頼による講演会・研修会などを実施しました。手稲区の在宅ケア連絡会でも、在宅療養にかかわる多職種連携の問題解決やスキルアップ支援を行っています。2012年より在宅医療連携拠点事業所となり、「チームかりんば通信」の発行を継続しています。

今後は、在宅医療・在宅看取りを自然な形のケアととらえる地域の「文化」づくりも重要です。地域の病院・在宅医との連携を強化するほか、在宅・終末期ケアの実績を共有するための研修受け入れも検討していきます。

Next Step 在宅医療の実績や経験を医療関係者と共有し、さらに地域内での連携を進める

Challenge 2 終末期の患者さんや超重症児にも、在宅での療養を可能に

Action **重症の方の在宅療養を支える訪問看護の取り組み**

家庭医療センター内の「はまなす訪問看護ステーション」は、1993年に開設し、末期がんや、脳疾患を含む神経系の病気など、また年齢層も高齢の方から乳幼児を含むお子さんまで、重症の患者さんに訪問看護サービスを提供しています。スピーディーな対応と24時間体制で患者さんご家族を支え、重症患者さんには不可欠である看取りの対応も年間25~29件を行っています。これらの機能の高さが認められ、2016年6月に

「機能強化型訪問看護管理療養費I」の認定を取得しました。今後も算定を維持する質の高いサービスを続け、地域から選ばれる訪問看護ステーションをめざします。



Next Step 多職種での顔の見える連携を強化し、より一層のサービス向上をめざす

Challenge 大規模災害の発生現場で、いかに急性期医療の提供を続けるか

Action **手稲溪仁会病院DMATが熊本地震に出動**
[手稲溪仁会病院]

2016年4月16日から19日まで、熊本県熊本地方で発生した熊本地震に対応するため、手稲溪仁会病院DMATが出動しました。

熊本地震は4月14日に震度7の地震発生後、16日に震度7の本震が発生。16日15時に北海道から道内DMATに出動要請があり、手稲溪仁会病院DMATは6名のチームを編成し、航空自衛隊千歳基地から自衛隊輸送機で熊本空港へ向かいました。17日朝から菊池市の十数カ所の避難所で状況把握と避難者の医療ケアに当たり、翌18日は阿蘇市・阿蘇医療センターで、医師・看護師は病院支援、その他メンバーは対策本部の業務支援を行いました。医師・看護師は19日朝に後任に引き継ぐまで当直を行い、その後大分空港から羽田空港を経由して戻りました。

チームリーダーを務めた奈良理救命救急センター長は「避難所の支援は初めてでしたが、災害時の避難所の様子を知ることができました。出動要請から2時間以内に準備を終えられ、日頃の準備・訓練の成果を感じました」と振り返ります。

その後日本医師会災害医療チーム(JMAT)にも、4月29日から5月5日まで6名の職員を派遣し、現地の医療機能が回復するまでの支援に携わりました。



阿蘇医療センターでの活動の様子

Next Step 経験を活かし、より現場のニーズに合った医療活動を追求し訓練する

Challenge 栄養面・安全面だけでなく、味の質も高めた給食の提供

Action **給食の質向上をめざし、コンテストに参加**
[手稲溪仁会病院]

入院中の食事は、栄養管理によって治療効果を高めるだけでなく、患者さんの入院生活の質を左右します。手稲溪仁会病院では、治療上可能な方には複数メニューからの選択形式を取り、保温保冷配膳車により温かいものは温かく、冷たいものは冷たい状態で配膳するなど、満足感につながる食事の提供を行っています。

また、新たなメニュー考案にも取り組んでいます。その中で、全国・全道規模で開催される病院食のレシピコンテストに積極的に参加しており、2016年度も2つのコンテストに参加し入賞しています。2015年11月に開かれた道産食材を使った医療・高齢者施設向け給食コンテスト「きた食dayコンテスト」で入賞したレシピの1つが、2016年4月下旬から5月上旬にかけて百貨店の惣菜コーナーで販売されました。

■2016年度コンテスト実績

きた食dayコンテスト2016	特別賞
第3回全国病院レシピコンテスト(乳和食部門)	金賞



きた食dayコンテスト2016特別賞受賞「実る秋の宝宝箱」

Next Step 栄養バランスの良い献立のレシピ提供など、地域にも活動の幅を広げる

Challenge 地域包括ケア推進のために、在宅介護を支える拠点が必要

Action

「小規模多機能型居宅介護あおば」開設

[青葉ハーティケアセンター]

小規模多機能型居宅介護は、事業所への「通い」を中心に「泊まり」や自宅への「訪問」などのサービスを組み合わせ提供するとともに、在宅で生活をする利用者さんが社会とつながりながらさまざまな生活のサポートを受けたり、介護を担うご家族の外出や休息など多様なニーズに合わせた利用ができればと、利用者さんが地域の中で暮らしていくには不可欠な施設です。地域包括ケアが推進される中、在宅生活を支える拠点として需要が高まっています。

2016年9月1日、青葉ハーティケアセンターに「小規模多機能型居宅介護あおば」がオープンしました。同事業所がある厚別区青葉地区は札幌市内でも高齢化率が高く、介護をするご家族へのサービスの充実が望まれていました。溪仁会グループとしては2番目の小規模多機能型居宅介護となります。同所の

大沢庸輔所長は「在宅の暮らしの可能性が広がるような在宅介護のモデルとして、また地域の安心の拠点となれるよう努力してまいります」とその目標を語っています。



Next Step さらに地域生活の拠点となることをめざし、ニーズに沿うサービスを提供

Challenge より質の高い訪問介護サービスの提供

Action

ホームヘルパーの質向上に向けた外部講師を招いての講習

[株式会社ソーシャル]

介護や支援が必要な人が在宅で生活していく中で、重要な役割を果たすのがホームヘルパーです。株式会社ソーシャルは、白石・中央・西の3事業所でケアプランに沿った訪問介護サービスを行っています。そのスタッフには、介護福祉士をはじめとした有資格者が多数在籍しています。

より良いサービスを提供し、ホームヘルパーのやりがいの向上にもつなげるため、月1回のヘルパー会議(研修)の際にたびたび、外部講師を招いた講習会を行っています。接遇、認知症、食中毒・感染症などのテーマを設け、各事業所でそれぞれ6~7回の講習を開催。事業所によっては「高齢者虐待」や「成年後見人制度」など関心の高いトピックスを絡めた講義を依頼し、毎年受講するスタッフにも新鮮な内容となるように工夫しています。

訪問介護は2018年度に制度改正を控えています。その中でもより選ばれる訪問介護サービスを提供し続けられるよう、引き続き研修に力を入れていきます。



Next Step 制度改正があっても対応できるよう、制度外サービスも強化していく

Column CSRの未来へ①

地域を支えるセーフティネットとして 社会から信頼される組織づくりに取り組んでいきます



社会福祉法人溪仁会
理事長
谷内 好

社会福祉法人制度改革と 組織改革への取り組み

「社会福祉法人」と聞いた時に、「何をしている組織なのかわからない」と感じられる方も多いのではないかと思います。地域の福祉事業を担う組織ではあるけれども、経営の中身については不透明な部分が多いというのがこれまでの実状でした。介護保険制度の導入で、さまざまな事業者が参入したことも、社会福祉法人のイメージを曖昧にしていました。

こうした社会福祉法人の在り方を見直し、本来取り組むべき事業や組織づくりを進めるために行われたのが、「社会福祉法」の一部改正による社会福祉法人制度改革です。組織経営のガバナンスの強化、事業運営の透明性の向上、地域における公益的な活動の推進など、社会への説明責任を果たし、地域に貢献するために取り組むべき事項が示されました。これによって社会福祉法人の経営は厳格な監視のもとで行われることになります。

社会福祉法人溪仁会は今回の制度改革を想定して、独自の中期ビジョンである「ビジョン福祉35」を策定し、「経営品質」「人財の育成」*「経営基盤の確立」に取り組んできました。また、各施設における「経営改善プロジェクト」では、地域の特性に合わせた自律的な運営を促してきました。そのため、制度改革によって組織の体制が変わることはなく、地域や利

用者さんへのサービスもこれまでと変わらない質を維持しています。今後は地域への貢献活動などを継続しながら、外部の厳しい監査に対応できる組織づくりを進めていきます。

理想とする社会福祉法人像を描き より質の高いサービスを

当法人が提供する質の高いサービスは、施設や職員一人ひとりの取り組みによって生み出されています。これからは、よりサービスの質を上げることが求められる時代になると予想されますが、何をすべきかについては、各施設が自律的に考えていく必要があります。「経営改善プロジェクト」に基づき、今後はより地域のニーズを捉えた活動を、各施設ごとに展開していく体制をめざしています。

また、介護の仕事をする人財の育成もテーマの一つです。働きながらキャリアアップを図り、生涯にわたって成長していくことが、介護現場で働くやりがいや喜びにつながります。介護の仕事は究極の人的サービスです。尊い仕事に誇りを感じ、向上しようという意欲を持ち続けてもらうために、将来のキャリア展望も示しながら一人ひとりの人生を支援していきたいと考えています。

当法人では、新たな中期ビジョンとして「ビジョン福祉40」を今年の6月に策定しました。重点事項として、法人の将来像を検討するプロジェクトの発足、公益活動や行政機関との連携を進め地域から信頼される存在となること、職員一人ひとりがチャレンジする組織風土の醸成の3点を掲げ、より質の高いサービスの実現をめざしています。

福祉に携わる法人として福祉サービスの充実に取り組み、可能性を広げていくことが地域への貢献や、ひいては地域包括ケアシステムにもつながると考えています。地域の福祉を支えるという社会的責任を果たすために、理想とする福祉サービスの姿を追求していきます。

*溪仁会グループでは、人材を宝として「人財」と表記しています。

より良いサービスを実現するために

～患者さん、利用者さんの笑顔をめざして私たちがすべきこと～

溪仁会グループの病院や施設では、さまざまな職種が連携しながら患者さんや利用者さんと向き合い、質の高いサービスを提供しています。

より良いサービスの実現をめざして努力を続ける専門職の方々に

溪仁会グループで働く意義や仕事へのサポート体制、

これからの目標や提言などを語り合ってもらいました。



松山 愛 (入職10年目)
定山溪病院
看護部 主任

朝倉 英司 (入職6年目)
月寒あさがおの郷
施設ケア部 生活支援課
ユニットリーダー

澤口 昌平 (入職6年目)
西円山敬樹園
居宅介護支援事業所 主任

網島 拓哉 (入職8年目)
札幌西円山病院
リハビリテーション部
理学療法科

吉川 あゆみ (入職6年目)
手稲溪仁会病院
薬剤部



AI MATSUYAMA



EIJI ASAKURA



SYOHEI SAWAGUCHI



TAKUYA TSUNASHIMA



AYUMI YOSHIKAWA

さまざまな職種が協力しながら「笑顔」のためのサービスをめざす

朝倉 私は以前、別の法人で働いていたのですが月寒あさがおの郷に入職して驚いたのが、どの職種も平等な立場で働いていることでした。私の話もきちんと聞いてくれて、介護のことを大切に考えてくれているのがわかり、とてもうれしく感じました。

澤口 確かに溪仁会グループは「チームの和」が強いと思います。私もいくつかの施設でケアマネジャーを経験しましたが、今の職場ではささいなことでも気軽に相談できますし、心強い仲間がいるという安心感があります。

松山 チームということでは、さまざまな職種が協力して困難なケアを実現できたときはうれしいですね。以前、重度の患者さんでカップラーメンを食べたいという方がいました。やけどの防止など、何度もみんなでカンファレンスを重ねて食べていただくことができました。そんなときの患者さんの笑顔が喜びになっています。

吉川 私は、婦人科病棟と血液内科病棟の薬剤業務を担当しています。働いていて気づくのは多職種でのカンファレンスの多さです。より良い治療をめざそうという意識が院内に根付いているのだと思います。また、さまざまな専門チームがあるので、判断に迷ったときでも適切なアドバイスを受けることができます。

網島 当グループの長所は、さまざまなステージに対応した病院や施設があることだと思います。私は神経内科病棟の担当のため、患者さんの在宅復帰をめざしてサポートしていますが、実際には困難な方もいらっしゃいます。そういう方をグループ内の病院や施設で受け入れていただくと、私たちも患者さんも安心できます。

朝倉 松山さんが、患者さんの笑顔が喜びと言われていましたが、私も同じ思いです。最近は介護の世界にも新しい技術や知識の導入が進んでいて、追いつくのに苦労しています。でも試行錯誤しながらケアに取り入れることで、利用者さんの心や体の状況が大きく変化して笑顔が見られたりすると、苦労は忘れてしまいます。

松山 トイレ介助も苦労されていることの一つだと思うのですが、何か工夫はありますか。

朝倉 トイレを使うことは、利用者さんの尊厳として大切なことなので、補助具なども使いながら手足にマヒのある方でもトイレに座れるようにサポートしています。「トイレをあきらめない」という思いで、一人ひとりの方に合った方法をアセスメントするようにしています。

澤口 そういう話を聞くと、すごい努力をされていると感じますね。なかなか実践できないことだと思います。

網島 トイレ介助の場合、リハビリテーションの立場では、その方の最大能力を評価して「こういう方法だったらここまで可能です」というアドバイスをします。でも、実際にそれを行うのは看護職や介護職なので、その人たちが毎回同じ方法で介助するのは難しい場合もありますね。

朝倉 月寒あさがおの郷にはリハビリテーションのスタッフがいるので、最初に気をつけることを専門的な立場から見てもらい、その後は状況に応じて対応しています。気をつけていることといえば、私は事故予防委員会の委員長をしているのですが、一番注意しているのが誤薬です。生命にかかわる場合もあるので、薬を管理する薬剤師さんはたいへんだと思います。

吉川 手稲溪仁会病院では患者さんの状況に応じて自己管理をお願いしています。管理が難しい方は病棟で薬を預かり、その都度、看護師さんから手渡してもらっています。

朝倉 利用者さんに薬を飲ませる時は、とても慎重になります。お名前を呼ぶなど、何度もチェックをしていますが、それでも不安ですね。

松山 認知機能が落ちている方は名前が間違っても「はい」と答えてしまうことがありますよね。私は名前を読める方には一緒に見てもらったり、「お名前を教えてください」と名前を言ってもらって確認しています。

朝倉 「お名前を教えてください」はいいですね。今度やってみます。



より良いサービスを実現するために

～患者さん、利用者さんの笑顔をめざして私たちがすべきこと～

職員の思いや熱意を受け止め ステップアップを支援してくれる組織

松山 私は去年、アメリカでの研修に参加しました。看護の現場を見学したり、先進的な事例を学ぶ中で、専門性の高い看護師の姿に刺激を受けました。私が担当する地域包括ケア病棟は入院期間が60日以内なのですが、短い期間でもより良いケアができるように、認知症などへの対応力を高めていきたいと思いました。

吉川 溪仁会グループは研修がとても多いですね。内部研修だけでなく、外部の講演会なども多く、興味のある学会にも出させてもらえるので、専門性を高めることができます。

澤口 ケアマネジャーはさまざまな分野のことを知る必要があるため、多くの研修を受ける必要があります。不在にすることも多いのですが、同僚たちが快く協力してくれるので助けられています。今年、主任ケアマネジャーの資格を取ったときも「今取れるなら挑戦しなさい」と周りから背中を押してもらいました。

朝倉 施設が主催する認知症研修などもありますし、スキルアップを図る環境が整っていると感じますね。さまざまな研修を受けることで介護のスキルが上がるだけでなく、視野も広げることができます。

綱島 リハビリテーションという仕事柄なのか、自分が得た知識を周りにも教えたいと思う人が多いですね。外部で研修を受けた人が、院内で勉強会を開いて研修の内容を伝えるというところが行われています。

吉川 今の病棟はがんの患者さんが多いため、日本臨床腫瘍薬学会などのセミナーに参加するようにしています。やはり担当している仕事と結びつく内容に興味がありますね。専門薬剤師の資格を持



つ先輩も多いので、自分も将来はめざしてみたいと考えています。

松山 定山溪病院にも認定看護師を取得したスタッフがあります。今は子育て中なのでなかなか難しいのですが、いつか認知症看護認定看護師の資格を取れたらと思いますね。

朝倉 私は将来の方向性が定まっていなかったのですが、最近、在宅部門のケアマネジャーに関心を持つようになりました。地域包括ケアシステムや在宅ケアが推進される中、利用者さんの自宅での暮らしにかかわってみたいと思うようになったのです。私の意識が変わったのは、研修でさまざまなことを学べたからだと思います。

澤口 私は居宅のケアマネジャーばかりを経験してきました。これをきわめるのもいいですが、やはり居宅と施設それぞれのサービスを知ってこそ、より良い選択肢を利用者に提示できると思うので、施設のケアマネジャーを経験する必要もあるのではと感じています。

綱島 私は病棟のリハビリテーションリーダーをしています。コミュニケーションの仕方などを工夫しながら「チームの和」を大切にすることに心がけています。今後は、他の職種との連携も深めていくのが目標です。

澤口 私たちの仕事はこれでいいというゴールがなく、試行錯誤を続ける日々ですね。でも、キャリアを積むことで、かかわった方が少しでも笑顔になっていただければ良いのかな、と考えています。

溪仁会グループとしてのメリットを活かし より質の高いサービスを実現するために

朝倉 私は、先ほどの松山さんのカップラーメンの話にとっても感動しました。施設ではそこまで細やかな対応が難しい場合もあります。でもどうすれば利用者さんが望むサービスを安全に提供できるのかということ、あきらめずに考えていきたいと感じました。

澤口 そういうサービスはどこでも提供できるものではないですね。でもそれが実現できたときに、利用者さんの笑顔や満足につながる。ケアマネジャーとして、そういった事例を知っていれば提案に活かせると感じました。

吉川 皆さんの話を聞いていると、急性期病院以外の現場も見てみたいと感じます。当グループにはさまざまな病院や施設がありますし、専門職同士での交流が進めば互いにアドバイスなどができることも多いのではないのでしょうか。

松山 グループ内の病院や施設から引き継いだ患者さんでも、文書の伝達だけでは詳細がわからない場合があります。定山溪病院に移られる前に私たちが施設や病院にうかがって、そこでの暮らしを見せていただくようなつながりができたらいいのでは、と考えています。それは自宅に戻られたときも同じで、退院後の生活まで見守りながらサ



ポートできるような仕組みがあるといいですね。

綱島 札幌西円山病院では退院して自宅に戻られた方に、1カ月後訪問を行っています。想定した生活がどれだけできているかを確認するのですが、今の話を聞いて、病院や施設に移られた方も見ていく必要があると感じました。

吉川 最近は退院される患者さんのその後の生活を見据えた薬剤師としてのかかわり方を考えるようになりました。退院後の支援のカンファレンスにも参加して、薬の管理方法を提案するようにしています。今日、皆さんの話を聞いて、これからめざすべきことが見えたような気がします。とても勉強になりましたし、いろいろな現場を見たいという思いが強くなりました。

澤口 皆さんと話をしながら、自分ももっとスキルを上げなければいけないと考えていました。心に残ったのは私もカップラーメンの話ですね。今後の目標を考えたとき、そういった要望をかなえられるようなサポートができたら、自分のステップアップにもなるのではと思います。そこに気づくことができるととても良かったです。

綱島 私も患者さんの笑顔のために、まだやれることがあるのだ、と気づくことができました。皆さんのように「私たちがこんな取り組みをしています」と自信を持って言えるようになりたいと思います。

朝倉 職種が違う人たちが集まって話をするだけで、こんなにいろいろなアイデアが出てくるのがすごいなと思いました。5人だけでもこれだけの意見が出てくるのだから、もっとグループ内の連携を強めていけば、さらに大きな力になるのではないかと思います。

松山 皆さんの話は共感できることばかりでした。職場や職種は違っても、みんな同じ方向を向いていることがわかり、うれしくなりました。今日はありがとうございました。

※本ダイアログは2017年8月3日に医療法人溪仁会法人本部において開催しました



地域の皆さまのために

地域の医療、保健、福祉を支えることも溪仁会グループの使命の一つです。
住み慣れた場所で生き生きと安心して暮らすことができるように——。
皆さまの笑顔思い描きながら地域に根ざした活動を続けています。

Human Story 3

**楽しく体を動かすことが、健康づくりにつながる。
利用者さんの表情の変化に喜びを感じます。**

岩内町の道の駅近くにある介護予防サロンりは、地域で暮らす高齢者に運動や交流の場を提供することで健康づくりをサポートし、要介護になるのを防ごうという施設です。通所のほか、介護予防教室での運動指導や近隣町村での移動サロンなど、地域に根ざした活動に取り組んでいます。運動指導を担当する大室真一さんは、前職が消防士という異色の経歴の持ち主。人と深くかわる仕事をしたいという思いから、40歳で作業療法士の国家資格を取得しました。

高齢者のケアを志望していた大室さんは、資格を取得後、コミュニティホーム岩内のリハビリテーションスタッフとして入社。2014年にりはるが開設されたからは交代で運動指導を担当し、2016年4月から専任になりました。「りはるでは地域に暮らす方々が、その人らしく豊かな人生を送っていただくための支援をめざしています。家に閉じこもりがちだった方が、ここに来て体を動かしたり、他の利用者さんと話をすることで、表情が明るくなっていくのを見ると、この仕事を選んでよかったと感じます」

現在、りはるに登録されている方は300人ほど。平日は毎日運営

しているのが特徴で、予約の必要がないため、気軽に立ち寄ることができるのも魅力です。利用者さんは大室さんの指導を受けながら1時間程度、軽いストレッチなどの運動を行い、あとはおしゃべりを楽しんだりして、思い思いの時間を過ごします。「身体の不調などの相談があれば病院の受診を勧めたりもします。普段のコミュニケーションの中から小さな変化や悩みに気づいて、地域包括支援センターなどにつなげていくことも目標の一つです」と大室さん。りはるの存在をもっと広く知ってもらうことで、地域の人たちの情報を集約する拠点としての役割もめざしていきたいと話します。

大室さんが最も大切にしているものは笑顔です。運動指導でも常に笑顔を決めず、時には冗談を交えて利用者さんたちを盛り上げます。「楽しく体を動かすことで、運動の効果は上がります。皆さんが笑顔になることが重要なのです」

これからは、りはるのスタッフとして地域包括支援センターや他職種との連携を図ると同時に、作業療法士として地域に貢献する活動にも取り組みたいと話す大室さん。思いやりと温かな心で、地域の暮らしや健康を支え続けていきます。



コミュニティホーム岩内
リハビリテーション課
介護予防サロンりはる
主任
大室 真一

Human Story 4

**地域で暮らす人たちの健康を守るという使命。
この仕事の意義を次の世代に引き継いでいきたい。**

溪仁会円山クリニックは、健診事業や生活習慣病改善指導など、地域の健康を守る活動に取り組んでいます。クリニックに来院できない方のために、健診車で出向いて定期健康診断などを行う巡回健診も重要な取り組みの一つ。心電図や視力・聴力・血圧測定から胃や肺のレントゲン検査、血液検査、医師の問診まで、充実した検査を職場や地域で受けることができるのが特長で、全道からの依頼にも応えています。

この巡回健診事業を受け持つのが経営管理部顧客管理課第3渉外グループです。刈金剛さんは2009年の入社以来、巡回健診事業の渉外担当として、企業側との折衝や受付・誘導業務といった現場でのサポート全般に携わってきました。今年4月に巡回健診に特化した第3渉外グループが新設され、刈金剛さんは長年の経験をもとにグループ長となり、若いメンバーで構成されたグループを率いることになりました。



溪仁会円山クリニック
経営管理部 顧客管理課
第3渉外グループ
グループ長
刈金 剛

「巡回健診に赴くのは年に180日ほど。遠くは釧路市や津別町など、さらには礼文島などの離島もあります。特に大きな病院がない町村や離島では、年に1度の巡回健診に対する期待が大きく、検査による身体状況の確認や病気の予防のほか、同行する医師が相談を受け、生活習慣病のフォローを行うことで、地域の方々の健康や生命を守る役割を果たしています」。病気の早期発見につながった事例もあり、巡回健診を受けてよかった、という声にやりがいや喜びを感じると言います。

巡回健診には時間や場所の制約、悪天候など、さまざまな苦労が伴います。刈金さんは常に先を読みながら、臨機応変な対応を心がけています。「勤務時間中に受診していただく方が多いので、できるだけスムーズに、かつ質の高いサービスを、というのが基本。細かな要望に応えながら、さらにニーズを引き出すことが目標です」

特定健診の義務化で、健康診断への理解や健康づくりへの意識が高まる一方、まだ健康診断を行っていないケースもあります。そうした企業などにいかにアプローチして、健康診断を実施してもらうかもテーマになっています。「溪仁会円山クリニックで健康診断を受けてよかった、と思っていただくためには信頼関係を築くことが大切。仕事の意義やノウハウを後輩たちにも伝え、地域の皆さんに満足していただけるサービスを提供していきたいと考えています」



医療や福祉の世界と地域をつなぐ取り組み

溪仁会グループは、病院や施設の取り組みを知っていただくため、地域の皆さまとのコミュニケーション活動を続けています。医療や福祉の世界に触れることで、多くの方に関心を持っていただき、ともに手を取りながら地域の医療、保健、福祉を考えていきます。

Subject 1

高齢者施設がどのような場所か、地域の方々が理解を深めるきっかけづくり

地域の小学生とふれ合う交流イベント

手稲溪仁会デイサービスつむぎでは、利用者さんに戦争体験を語っていただく会など、以前から地元の鉄北小学校との交流を続けてきました。4年ほど前から始まったのが、利用者さんとふれ合う「交流

会」です。5年生の皆さんに施設を見学してもらい、そこで見聞きしたことをもとに利用者さんへのレクリエーションを企画・実施してもらっています。2017年7月に行われた交流会の様子をご紹介します。



鉄北小学校5年生の皆さんがレクリエーションを提供するために来訪。少し緊張気味に「よろしくお願ひします」と挨拶をすると、利用者さんは笑顔で迎えていました



トランプや折り紙、おはじきなど、それぞれが考えてきたゲームや遊びを説明しながら、一緒に楽しめます。大きな笑い声此起彼伏など、利用者さんは心から楽しんでいるようでした



記念の折り紙をプレゼント。利用者さんたちは大切にそうに受け取っていました

最後にYOSAKOIソーランの踊りを披露。「参加させていただいてありがとうございます」と挨拶をすると、利用者さんの間から拍手や歓声がわき起こりました



拍手に送られて退場。「また来てね」という利用者さんの声に、うれしそうに手を振り返っていました



「開かれた施設」をめざして福祉を身近に感じてもらう活動を

福祉施設というのは閉ざされた場所になりがちで、地域にあるのに「よくわからない」というイメージを持つ方も多いと思います。今回のようなイベントは、利用者さんに楽しい時間を提供していただくだけでなく、核家族化で高齢者と接する機会が減っているお子さんに、利用者さんを理解してもらい、優しく見守っていただくきっかけになればと考えています。

お子さんたちとのふれ合いで見せる利用者さんの笑顔は、私たち職員がどんなに頑張っても見られない生き生きとした表情です。今回の経験を通して、お子さんたちに福祉の仕事の楽しさを知ってもらえればと期待しています。これからも地域と連携した取り組みを続け、地元の皆さまに気軽に来ていただく機会を増やしたいと考えています。



手稲溪仁会
デイサービスつむぎ
所長
土井 陸維

Subject 2

医療、保健、福祉にかかわる仕事はどういうものか、理解を広げる

職場体験イベントが職業選択の手助けに

溪仁会グループは、地域のお子さんを対象に、さまざまな職業体験の場を設けています。病院や施設の仕事を体験してもらうことで医療や福祉に対する理解を深めてもらうと同時に、視野を広げ、将来の進路を選択する際にも役立ててもらいたいと考えています。

そうした職業体験がきっかけとなって、医療や福祉の世界を志す

人もいます。お子さんたちに医療や福祉の仕事のすばらしさを伝え、地域を支える人財づくりにつなげることは、社会貢献活動としても重要な意味があります。より多くの若い人たちが、医療や福祉の仕事をめざしてくれることを願って、病院や施設での体験事業に取り組んでいます。

福祉の仕事を経験したことで自分がやりたいことに気づきました

私はこの春に高校を卒業し、きもべつ喜らめきの郷の介護職員として働き始めました。入職のきっかけは、母が当施設で働いており、昨年行われた「こども参観日」(P50参照)に参加したことでした。普段から母に仕事の話聞いていたため、介護の現場を実際に見てみたいと考え申し込みました。



窓から外を見ている利用者さんが多いことから、天気の良い日はなるべく一緒に外に出かけるなど、その方の思いを大切にケアを心がけています

イベントでは、利用者さんとの交流や職業体験などを行い、利用者さんとふれ合ううちに、「私も皆さんのために何かできることをしたい」と感じました。人とかかわるのが好きで、人の役に立つような仕事をしたいと考えていたこともあり、介護の仕事への関心が強くなりました。母に相談したところ「やっぴー」と背中を押してもらい、当施設で働

くことを決めました。

介護の知識や技術は何も知らなかったため、先輩たちに教えてもらいながら少しずつ仕事を覚えています。思うようなケアができず、悩んだりすることもあります。できるだけ利用者さんの声や目線に気を配り、一人ひとりの方にこまやかなケアを提供するように心がけています。自分なりに工夫して接したことで、利用者さんから「ありがとう」と言ってもらえると、仕事に自信を持つことができます。将来は先輩たちのように介護福祉士の国家資格やケアマネジャーにも挑戦してみたいと考えています。

介護や福祉とは無縁とと思っている人でも、私のように一歩踏み出して体験することで未来が変わることもあります。ぜひ、多くの人に介護や福祉の仕事を経験し、魅力を感じてもらいたいと思います。



きもべつ喜らめきの郷
介護職員
細川 千遥

その他の取り組み

Subject 3

進路を考える生徒に病院の仕事に触れる機会を

ふれあい看護体験

5月12日の「看護の日」とその前後1週間の「看護週間」に合わせて、手稲溪仁会病院と定山溪病院では、進路を考える高校生に看護の仕事にふれる機会を提供する「ふれあい看護体験」を実施しています。2016年は両院ともに5月11日に開催。手稲溪仁会病院には札幌手稲高校の生徒さん10名、定山溪病院には札幌南陵高校の生徒さん25名が参加し、施設の見学や患者さんの介助などの体験を行いました。



定山溪病院で、患者さんの食事の介助を体験する生徒さん



手稲溪仁会病院では、足浴介助の体験により患者さんとふれ合いました

Subject 4

介護の仕事の大切さを体験を通して次世代に伝える

楽しくまなぶKAIGO in やくも

社会福祉法人溪仁会では、地域へ福祉・介護の仕事の大切さや魅力を伝えるイベントを開催しています。2016年は八雲町で開催し、中学生・高校生を対象とした「就業体験」と、一般の方対象の「地域公開セミナー」の2本立てでイベントを行いました。就業体験には、八雲町立野田中学校の生徒さん9名と、北海道八雲高校の生徒さん2名が参加。コミュニティホーム八雲で、高齢者の疑似体験やリフト移乗体験、利用者さんとのレクリエーション活動を体験しました。



参加した生徒さんは高齢者疑似体験セットを装着し、歩行などをして高齢者の感覚を体感

Challenge 地域で暮らす方にとって関心の高い話題をわかりやすく伝える

Action

「生活の場での看取り」をテーマに地域公開講座を開催

[札幌西円山病院・定山溪病院]

超高齢社会を迎え、地域でいかに暮らすかということへの関心が高まっています。札幌西円山病院と定山溪病院は、初の共催となる地域公開講座「生活の場での看取り・その人らしい最期とは」を2016年10月に開催しました。第1部では宮崎県で「ホームホスピスあさんの家」を運営する市原美穂さんを講師に迎え、「あなたは人生の最期を、“どこで”“どのように”過ごしたいですか」という講演を、第2部では市原さんと来場者とのディスカッションが行われ、市民の方や、医療・福祉に携わる人たちから熱心な質問が寄せられました。

講座の開催にあたって重視したのが、一般の市民の方に向けた内容にすることでした。札幌西円山病院の大植友樹地域

連携推進室副室長は「社会が地域包括ケアシステムに向かっていくなかで、看取りは大きなテーマです。当日は医療・福祉の専門職の方が多く来場されていましたが、そういう人でも死に直面することは少ないはず。誰もが一市民の立場で看取りについて考えることが大切だと考えました」と振り返ります。

市民向けの公開講座は、定山溪病院にとって初の試みでした。同病院の菊地攻地域連携室室長は「札幌西円山病院は医療公開講座のノウハウを持っていることから、一緒に何かできないかと考えていました。同じ慢性期医療を受け持つ病院として、抱えている課題も期待する内容も一致していました」と言います。

札幌にはホスピスの専門施設がなく、特に自宅のような環境で過ごす「ホームホスピス」という取り組みは、来場者の関心を集めていました。さらに「終末期医療に取り組む定山溪病院が、院外での看取りをテーマにしたことも、注目を集めたのではないのでしょうか」と菊地室長。大植副室長は「これからもテーマによっては公開講座を共催していきたい」と意欲を見せます。

地域の人たちとともに学び、考える機会をつくるために、これからもニーズに応える活動に取り組んでいきます。



札幌西円山病院 経営管理部 次長 地域連携推進室 副室長 大植 友樹
定山溪病院 経営管理部 部長代理 地域連携室 室長 菊地 攻



札幌市医師会館で開催された地域公開講座の様子

高齢者の健康づくりへの意識を高める医療公開講座

[札幌西円山病院]

札幌西円山病院ではこれまで培ってきた老年医療のノウハウを地域貢献に活かすために、月に1回「地域で暮らす高齢者のための医療公開講座」を開催しています。毎回、医師や看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、管理栄養士など、さまざまな専門職が講師を務め、病気の予防や健康づくりなどについてわかりやすく解説。座学や実際に体を動かす実技を交え、楽しく学べる内容になっています。また、相談コーナーでは、健康や運動、食事などについて個別の質問を受けています。

さらに、地域での啓発活動として、外部への専門職の講師派遣にも積極的に取り組んでいます。こうした活動を通して、地域の方々の健康づくりをサポートしたいと考えています。



楽しく実践的に学べる医療公開講座

Next Step 地域の高齢者のニーズをふまえ、積極的な啓発活動を推進する

Challenge 小児の在宅医療を支援するネットワークづくりに取り組む

Action

医療が必要な子どもたちの在宅生活を支える体制へ

[医療法人稲生会]

高度な医療的ケアを必要とするお子さんは、ご自宅から離れ、長期の入院生活を送らなければならないことがあります。そのようなお子さんたちに在宅医療や在宅ケアを提供し、ご家族を支援する環境を整えれば、多くのお子さんをご自宅での生活を選択できるようになります。

北海道では、そのようなお子さんとご家族の在宅生活を支援する「北海道小児等在宅医療連携拠点事業（愛称：YeLL=いえーる）」が、2015年10月にスタート。医療法人稲生会は補助事業者として、法人設立以来取り組んできた小児在宅医療のネットワークづくりや支援体制構築のノウハウを活かし、同

事業を推進しています。

同事業では、北海道小児等在宅医療推進協議会の開催や地域資源の情報収集と発信、医療機関への技術支援や勉強会の実施、関係機関との連携、患者さんやご家族からの相談対応など、在宅医療の普及啓発を中心に活動を行っています。北海道全域で小児在宅医療を展開するための基盤づくりをめざし、活動の幅を広げてきました。2017年度は十勝地域において「いえーる in十勝」が始動しました。こうした動きを全道に広げ、お子さんとご家族がどこにいても、安心して在宅医療を受けられる環境づくりに取り組んでいきます。

障がいのある人もない人も一緒に作品づくり ～ペットボトルキャップアート制作～

医療法人稲生会は、お子さんの在宅医療や障がいに対して関心を持ってもらい、理解を深めるための活動に力を入れています。毎年秋に開催される「いっしょにね！文化祭」は、障がいのある人も、ない人も一緒にさまざまな催しを楽しむための発表会です。医療法人稲生会は第1回から参加し、第3回目となる2016年は、ペットボトルキャップアートづくりに挑戦しました。

生涯医療クリニックさっぽろの工藤裕子歯科衛生士は、「患者さんやご家族、来場者など、多くの方が一緒に取り組める内容にしようと考えました。身体に障がいのある方でも、小さなお子さんでも、高齢の方でも、誰でも簡単に参加できて、たくさんの方にかかわってもらえることから、ペットボトルキャップアートを選びました」と経緯を説明します。作品づくりだけでなく、キャップを集めたり仕分けしたりする段階から多くの方にご協力いただき、ペットボトルキャップアートづくりがスタートしました。

ベースとなる絵は、事故による四肢まひがあり、口で筆をとって絵を描くまへだはるかさんの原画を使わせていただきました。はるか



地域のお子さんなど、多くの方にご協力いただきました



会場には原画を描かれたまへだはるかさんも来場されました

さんは「ちいさな ちいさな おんなのこ」などの絵本を出版されています。やさしく、愛らしいタッチの絵が、今回のテーマにぴったりでした。

作品づくりは生涯医療クリニックさっぽろの患者さんや地域の保育所、生活介護事業所などにも協力をお願いしました。最後の仕上げは会場で行い、来場者やイベント参加者などにも手伝っていただきました。また、原画作者のはるかさんもご家族と来場され、ブースに立ち寄られました。楽しく参加できる作品づくりは、多くの方の関心を集めていました。

「今回のように障がいのある人、ない人が一緒にかかわることができる取り組みはたくさんあるはず。一つひとつの活動を通じて、障がいのある人と地域の人たちがかわるきかけをつくっていききたい」と今後の目標を語る工藤さん。同法人ではこれからも、さまざまなかたちで情報発信を続け、地域社会とつながる活動に取り組んでいきます。

完成した作品。たくさんの方の思いが詰まった力作は、生涯医療クリニックさっぽろのエントランスに飾られています



医療法人稲生会 生涯医療クリニックさっぽろ 歯科衛生士 工藤 裕子



Next Step 北海道全域に活動の輪を広げ、地域の方々の理解促進もめざす

Challenge ボランティアさんのサポートで家庭的な温かいサービスを実現

Action **利用者さんに楽しい時間を提供する喫茶ボランティア**
[西円山敬樹園]

溪仁会グループの活動は、地域の方々の温かなご支援に支えられています。家庭的なふれ合いや文化的な活動など、病院や施設のサービス向上に活躍されているのがボランティアさんです。

西円山敬樹園では週に1回、喫茶店「樹(やすらぎ)」を開設し、接客やメニュー作りなどをボランティアさんをお願いしています。利用者さんからは「本当の喫茶店に来たみたい」と好評で、ボランティアさんとの会話を楽しみにされている方もいます。柿崎



顔なじみの利用者さんとの会話が弾みます

文子さんは、喫茶ボランティアを始めて7年目。ボランティア活動にやりがいを感じていると笑顔で話されます。

「施設などでお手伝い

できることがあればと考えていたとき、情報誌を見て西円山敬樹園の喫茶ボランティアを知りました。できるかどうかよりも、やってみたいという気持ちで始めましたが、利用者さんや職員の方との会話が楽しく、今まで続けることができました。「おいしい」という声を聞くとうれしいですし、日頃の疲れが吹き飛びます」

現在、喫茶ボランティアは3名体制で行われています。「食事制限のある利用者さんは、職員の方に確認をとるなど、一人ひとりへの配慮を心がけています。自分自身も体調管理をしながら、楽しく、長く続けていきたいと思えます」と柿崎さん。ボランティア活動にご協力いただく皆さんに支えられて、今後も溪仁会グループは地域とのつながりをさらに大切にしていきます。



西円山敬樹園
喫茶ボランティア
柿崎 文子さん

Next Step 多様な方々にかかわっていただくための働きかけを強化

Challenge 障がい者の支援とともに、地域に参加できる居場所づくりが必要

Action **障がい者と共に生きるための「地域づくり」活動**
[相談室こころ ていね]

「相談室こころ ていね」は、障がい者福祉サービス利用のケアプランを作成し障がい者の生活を支えること(指定相談支援事業)、幅広く障がい者・家族・地域住民の相談を受ける身近な相談窓口となること(札幌市からの委託相談支援事業)を行っています。その中で現状の福祉サービスなどでは対応しきれない地域の課題を抽出し、その解決に向けた「地域づくり」を行うことも大切な役割の一つとなっています。

その一環として、一般社団法人手稲まちづくりネットワークが主催する「ていねコミュニティカフェめりめろ」の活動に参加しています。このカフェは「地域の誰もが気軽に立ち寄れる場所」というコンセプトで、高齢者支援や子育て支援、生活困窮者支援などを行う方々と共に運営されています。相談室こころ ていねは、地域で活躍する人を講師に招いた「お仕事バー」の開催

や、子ども食堂企画「夕暮れなごみ場」に発達障がいのある子どもの親子での参加など、毎月さまざまな企画を実施し障がい者と地域との交流を進めています。また、障がい者がボランティアのカフェスタッフとして働く機会もつくっています。



Next Step 誰もが地域の一員として活躍できるまちづくりを協力して継続していく

Challenge 過疎化・高齢化が進む自治体で、住民の健康づくり施策に取り組む

Action **過疎地域の自治体と連携し、健康プログラムを開発・提供**
[社会福祉法人溪仁会]

社会福祉法人溪仁会は、喜茂別町、島牧村、積丹町、ニセコ町の4町村と連携した健康支援事業に2015年から取り組んでいます。喜茂別町に設けられた広域連携健康支援拠点に健康相談員を配置し、^{スカイプ}skype通信による遠隔プログラムやテレビ電話による定期面談など事業コストを下げる工夫を盛り込みながら、高齢者の健康づくりを支援するプログラムを開発・提供しています。

2016年度は、教育講演会や身体・体力測定と個別健康相談、それらのデータベース管理、Web運動教室と現地指導者の技術研修を基本メニューに設定。そこに自治体のニーズに合わせて、ハイリスク群の個別指導などのオプションを組み合わせて、2段階式のメニューとしました。

また、喜茂別町を先行事例として、介護分野の地域支援事

業にも展開を進めています。現在は「町民元気かて」で健康情報を共有し、IP電話を活用した独居高齢者の見守りと訪問、医療・介護予防の視点から個別運動プログラムの作成・指導を行う「80(はちまる)ウォーク」などに取り組んでいます。これらの効果を継続評価し、各自治体へ有意義なプログラムの提供を続けていきます。



喜茂別町で実施されている「80ウォーク」事業の様子

Next Step 地域向けの健康教室などを定期開催し、健康意識向上へ寄与する

Challenge 高齢化が進む地域からの健康増進企画に、専門家として協力する

Action **イベント感覚で気軽にがん検診&健康チェック『まちけん』を開催**
[定山溪病院]

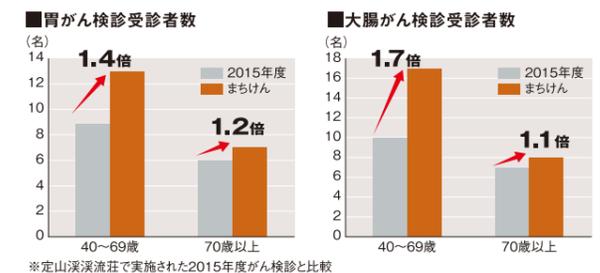
南区は札幌市で最も高齢化率が高く、32.7%に達しています。南区保健福祉部は開湯150周年を迎えた定山溪温泉との協働で「南区健康寿命延伸『健康なまち定山溪』応援プロジェクト」を立ち上げました。

定山溪病院はこのプロジェクトに共催として協力し、2016年4月20日に定山溪ビューホテルで「出張!あなたの街でけんしん&健康チェック会『まちけん』」を開催しました。胃がん・大腸がん



の検診に加え、健康チェックとして血圧・骨密度測定や血管・脳年齢測定などを実施。さらに理学療法士の指導によるロコモ予防体操や歯科医師・歯科

衛生士による歯科健診・相談、健康相談など、健康に関するさまざまなコーナーを設けました。当日は定山溪地域に在住の方を中心に、札幌市内から約120名の参加がありました。参加者の自身の健康への関心の高さが感じられたため、今後も健康教室などで地域での健康の啓発を続けていきたいと思えます。



Next Step 地域向けの健康教室などを定期開催し、健康意識向上へ寄与する

Challenge 国際的な高齢化問題に、先行事例として注目される日本から協力

Action

台湾作業療法士協会が来訪

[コミュニティホーム白石]

2016年9月9日、台湾作業療法士協会の作業療法士4名・学生4名が、コミュニティホーム白石の視察に訪れました。台湾では2018年より介護保険制度の運用をめざしており、病院・訪問サービス以外でのリハビリテーションの可能性が模索されています。そのため台湾作業療法士協会から日本の介護老人保健施設を視察したいという希望が日本作業療法士協会へ寄せられ、コミュニティホーム白石が視察先の一つに選ばれました。

当日は最初に介護老人保健施設の概要についての説明を行い、続いてリハビリテーションやデイケア、施設内の各スペースの見学が行われました。最後に質疑応答を行い、介護老人保健施設の役割などについて質問が寄せられました。約3時間の視察でしたが、溪仁会グループにとって有意義な国際交流の機会となりました。



介護老人保健施設の役割を説明



Next Step 研修の派遣・受け入れを通じて国際的に介護・福祉の発展をめざす

Challenge 認知症に対する地域の理解を広げる機会をつくる

Action

手稲溪仁会デイサービス織彩「RUN伴」へ参加

[手稲つむぎの杜]

2016年7月15日、認知症になっても安心して暮らせる地域づくりを啓発するイベント「RUN伴(ランとも)」に、手稲溪仁会デイサービス織彩の職員が若年性認知症の利用者さんと一緒に参加しました。このイベントは認知症の方やそのご家族、医療・介護関係者が、おそろいのオレンジのTシャツを着て自分たちの住む街を走り、街から街へとタスキをつないで日本縦断をめざしながら、地域の人々との交流や認知症への理解につなげることを目標としています。

職員と利用者さんは社会福祉法人本部(北海道神宮そば)付近の交差点でタスキを受け、南9条までの2.4kmを走りました。当日は織彩の利用者さん全員と社会福祉法人本部の職員が応援に集まり、大変な盛り上がりとなりました。参加した職員は「すべて走るのは大変だと思いつきましよう」と声をかけまし

たが、利用者さんは『燃え尽きよう!』とほとんど歩かずに一生懸命に走ってくれました」と当日を振り返りました。歩きや車いすでの参加もできるため、今後は利用者さん全員で参加できる形を考えています。



イベント当日の様子

Next Step 利用者さんの参加を広げ、さらに地域との交流につなげる

Challenge 高齢の方が健康を維持できるような運動プログラムが必要

Action

「いきいき健康体操」が映像コンクールで入選

[おおしまハーティケアセンター]

おおしまハーティケアセンターは、溪仁会グループが唯一道外(宮城県気仙沼市・大島)で運営する高齢者福祉施設です。通所サービスや短期入所などのサービスを提供し、介護が必要な方の暮らしを支えています。

2007年からは岩手県エアロビック連盟理事の藤野恵美子さんの指導で、「いきいき健康体操」を利用者さんのプログラムの一つとして実施しています。

利用者さんがこの体操を楽しみながら行っている様子を映像に収め、日本エアロビック連盟主催の「第9回全国エアロビック映像コンクール2016」スローエアロビック部門に応募しました。このコンクールは笑顔や生き生きとした表情でエアロビックを楽しんでいる様子が評価されるもので、2017年1月29日に結果発表があり、5つの入選作の1つに選ばれました。

同センターの高橋倫子リーダーは「藤野先生がいっしょやる限り、今後もずっと続けたいです」と話しています。



Next Step 利用者さんや地域の方々に健康プログラムを広げる

Challenge 地域の方々が気軽に参加できる場で、医療や福祉に関する情報を提供する

Action

「手稲ふれあいフェスティバル」で在宅医療の講演を実施

[手稲家庭医療クリニック]

手稲区では、行政機関や地域の医療・介護施設、関係機関が協働し「手稲ふれあいフェスティバル」を毎年開催しています。高齢者施設の見学会や手稲駅コンコース「あいくる」での展示、血圧・体脂肪測定と健康相談、医療・介護・福祉にまつわる相談など、地域の健康や福祉にかかわるさまざまな催しを行うイベントです。2016年には第20回を迎え、9月9日と10日に開催されました。

このイベントの実行委員長を、手稲家庭医療クリニックの小嶋一院長が務めています。イベントの中で院長は、在宅医療や認知症など、毎年さまざまなテーマで講演会を行っています。2016年は「住み慣れた手稲区で過ごすために〜手稲区の在宅医療をご存知ですか?〜」と題した講演を実施。手稲区の在宅医療で生活されている方々と、支援する関係機関の実践の

様子をまとめたオリジナルの映像を公開し、在宅医療サポート体制の現在を解説しました。地域住民100名の方々が参加し、在宅医療の在り方を共に考える機会となりました。



ご家族やご遺族の声も映像で紹介し、在宅医療への不安や戸惑いに対する実際のサポートについて伝えました

Next Step 地域の方々の関心が高い内容で、関係機関も含めた医療や福祉の活動の現在を伝えていく



仕事のやりがい・パワーの源



それは一人ひとり

りが輝いてこそ



溪仁会グループでは、さまざまな特技や趣味を持つ人たちが働いています。プライベートでも仕事でも、きらりと輝く人をご紹介します。



ポール上の美しいポーズは鍛えた体があってこそ。「ポールダンス」に魅せられています。

学生時代に理学療法士の国家試験を受ける前、息抜きに何か運動をしたいと思っていた時に、テレビ番組で見たのがポールダンスでした。「札幌でできるのかな?」と思って調べたところ、ポールダンスのクラスがある唯一のダンス教室を発見。見学に行った日に、その動きに魅せられて申し込みをしていました。

1本の直立したポールに登り、回ったり、ポーズを取ったり。その時は腕のほかに太ももやふくらはぎなど、体のあちこちで体重を支えます。ダンスという華やかなイメージですが、ポールにふれるところはあざだらけになり、体じゅうが痛くなりました。それでも90分のレッスン中にどんどん技ができるようになるのが楽しくて、のめりこんでいきました。

今年の5月には、ダンス教室の発表会で初のステージに立ちました。舞台上のポールは高く心臓がドキドキしましたが、たくさんの人に見ていただくのは良い経験でした。

業務にも力を使う場面は多くあります。仕事とポールダンスの両方で体が鍛えられ、学生時代の実習では患者さんを支えられなかったのが、一人で支えられるように。また、ストレッチなど体のメンテナンスもポールダンスのおかげで習慣付いたので、これからも長く続けていきたいと思っています。

課題をクリアしたときの達成感が「フリークライミング」を続ける原動力です。

私がフリークライミングを始めたのは19年前の20歳の時。父親がやっているのを見て「楽しそうだな」と思ったのがきっかけでした。屋内施設でのボルダリングから始め、小樽などの岩場で経験を積みました。始めて間もなく大会に出て優勝することができました。20代は競技として真剣に取り組み、北海道の大会では優勝を続け、国体にも7回出場しました。

今は週に1回のペースで屋内施設や岩場を登っています。難易度の高いルートや課題(決められたコースのようなもの)を登り続けるために、体力維持を兼ねてランニングや筋力トレーニングも始めました。

フリークライミングの醍醐味は、難しい岩場を登れたときの達成感。ルートや課題をクリアするにはパズル的な要素もあり、頭も使います。私は体が小さい方なのですが、バランス感覚や柔軟性、進路を組み立てるロジックなど、体格ではないところで勝負できるのも魅力です。

岩場を登るときのサポートなど、フリークライミングは、仲間の協力がなければできないスポーツ。互いに技能を高め合う仲間の存在は一生の宝物です。40代を迎えても健康を維持しながら、仲間たちと難関の岩場に挑んでいきたいと思っています。

言葉にできない思いを読み取る「指談」を患者さんやご家族のために役立てていきたい。

病気などで会話ができなくなり、意思の疎通を図るのが難しくなった方と、指の動きを通してコミュニケーションを図るのが「指談」です。私は日々の仕事で患者さんの身体に触れていますが、そのような方でも、ちょっとした動きの変化を感じることがありました。伝えたい思いがあるかもしれないのに、くみ取ることができないもどかしさを感じ、何か手段はないかと探していたときに、指談のことを知りました。

指談は、相手の指を自分の手のひらに当てて話しかけ、「はい」の場合は丸を描いてもらうなど、指先のわずかな動きから言葉や答えを読み取るというものです。最初は、本当にそんなことができるのかと半信半疑でしたが、実際に指を手に当てて話しかけると、答えが返ってくるのがわかりました。この体験から真剣に技術を学び始めました。

昨年、初めて入院患者さんの思いを読み取ることができ、担当スタッフにもその内容を伝えました。このことをきっかけに、数人の患者さんと指談でコミュニケーションさせていただきました。

院内でも少しずつ指談への理解が広がっています。患者さんやご家族にも喜んでいただけるように、語りかけを続けていきたいと思っています。

休日は釣り竿を持って海や川へ。「釣り」の世界に医師としてかかわってみたい。

釣り好きだった父親の影響で、小さいころから釣りに親しんできました。のめりこんだのは、学生時代に釣具店でアルバイトをしてから。釣りにはいろいろなジャンルがあることを知り、中でもジギングという、船から金属製のルアーを海中に投げ込み、しゃくるように巻き上げながら大物の魚を狙う釣りに夢中になりました。当時、名古屋にある大学に通っていたのですが、仲間たちと八丈島まで釣りに行ったりしました。また、海外にも遠征に出かけ、これまでに台湾やマレーシア、ニュージーランドなどでその土地ならではの釣りを満喫しました。

私の釣りはジャンルを絞らないスタイル。ジギングに限らず、ルアー・フライフィッシングからヘラブナ釣りまで、さまざまな釣りを楽しんでいます。今年の1月から手稲溪仁会病院に勤務していますが、北海道に来てから学生の頃始めた鮎釣りを再開しました。イギリスでは地元発祥のフライフィッシングが盛んで、それを見て私も日本の伝統文化である鮎釣りにまたチャレンジしたいと思っていましたので、北海道に鮎釣りで有名な川があったのは良いきっかけになりました。

釣りの魅力は、狩猟本能が満たされること。いつかは、30kg超えのカンパチや、体高のある美しい鮎を釣ってみたいと思っています。



Zepp Sapporoで行われたダンス教室の発表会での1枚(写真上、前列中央が荒田さん)と、ふだんのレッスンの様子(写真右)

札幌西円山病院
リハビリテーション部
理学療法科
荒田 遥



天然の岩場を登る川股さん。難しい岩場は攻略するのに半年もかかることがあります

コミュニティホーム白石
経営管理部
施設管理課
川股 心



「指談」で指先を通じて伝わってくる患者さんの思いを読み取ります

定山溪病院
リハビリテーション部
理学療法科
岩井 祐子



鳥羽沖で「トーパス」と呼ばれる大型のスズキを釣り上げたときの1枚

手稲溪仁会病院
救急科
小野寺 良太

働きがいのある職場づくり

溪仁会グループは、職員一人ひとりの生き方や個性を尊重しています。
夢や目標を持って働くことができる職場づくりに取り組み、
キャリアデザインを描くことで職員の皆さんの人生を支援していきます。

Human Story 5

働く喜びを感じられる現場に。 「みんな平等」の精神で福祉の現場を支える。

社会福祉法人溪仁会は、北海道のさまざまな地域で高齢者福祉を支える活動に取り組んでいます。コミュニティホーム八雲は、八雲町唯一の介護老人保健施設として1998年に開設。向幸恵施設長は翌年の1999年に着任し、18年にわたって利用者さんの健康や生活を見守ってきました。着任当時、隣町の森町でクリニックを開業していた向施設長は、70代後半になった現在も森町から愛車で通勤しています。「早起きは得意だし、運転も楽しいから苦になりません」と楽しそうに笑います。

向施設長の一日は、夜間の利用者さんの状況報告に始まり、薬の処方、カンファレンス、通所リハビリテーションの回診、会議など、目まぐるしく過ぎていきます。気さくに利用者さんに声をかけてさりげなく体調を確認し、一人ひとりの話に耳を傾ける様子からは、年齢を感じさせないバイタリティーと医師としての情熱が伝わってきます。「この年になっても元気でいられるのは、ここで働いているから。仕事を辞めたいと思ったことはなく、働けることに幸せを感じています」

向施設長がサービスの質の向上とともに重視しているのが職員の働く環境や意識の改善です。当初は離職者が多かったことから、

向施設長は誰もが自分の考えを言える風通しのよい職場に変えていこうと決意。「役職や職種に関係なく、みんな平等」というメッセージを常に伝え続けたそうです。さらに、職員のアイデアや意見を活かすように働きかけたことで職場内に活力が生まれ、今では職員の定着率も高まったといいます。「働く喜びを感じてもらうために、できるかぎりその人のいいところを評価するようにしています。職場の雰囲気がよくなり、笑顔でやりがいを持って働けるようになることで、自然にサービスの改善にもつながると考えています」

コミュニティホーム八雲の魅力になっているのが、家庭的な温かさです。心のかもったケアや利用者さん本位のサービスが高い評価を受けていますが「まだまだできること、足りないことはある」と向施設長。より質の高いサービスを実現するために、若い職員たちの、資格取得なども含めたスキルアップを支援していきたいといいます。

「当施設は来年で開設20周年を迎えます。今の目標は次を担うリーダーを育てること。私が元気なうちに、八雲町の高齢者福祉を支える人たちを育てたいと考えています」

コミュニティホーム八雲
施設長
向 幸恵



Human Story 6

ここには職員の成長を応援してくれる環境がある。 海外研修での学びを日常のケアに活かしていきたい。

溪仁会グループは、職員がキャリアアップを図り、生きがいを感じながら働くことができる環境づくりをめざしています。菊水こまちの郷で看護・介護課の副主任を務める山際恵美子さんは、公益財団法人社会福祉振興・試験センターが主催する「民間社会福祉施設職員等海外研修・調査」の一員に選ばれ、2016年の秋にオーストラリアでの研修に参加。現地で高齢者福祉施設や在宅サービスの視察、行政機関などへの訪問を行い、認知症ケアを中心に先進的な事例を学びました。「オーストラリアでの体験は、これまでのケアの常識を覆されることばかりだった」と振り返ります。

「認知症の方に対するアクティビティ専門のチームがあり、毎日のように異なるプログラムが行われていることに驚きました。また、夜になっても寝ない利用者さんがいるときは、無理に寝かそうとするのではなく、スタッフもバジャマになって一緒に時間を過ごしていました。昼寝も取り入れていて、それでは夜に眠れないだろうと思ったのですが、まずは利用者さんに体を休めてもらうことが大切なのだ、という説明を聞いて、日本の高齢者ケアとの違いを感じました」

認知症に対する社会の考え方も、日本とは大きく違っていたといいます。オーストラリアでは、認知症の早期に告知をして、その後の生活を本人や家族が選択できるようにしています。自分の人生を自分の責任で決めるという意識が根付いているのを見て、山際副主任の考え方も変わったそうです。「オーストラリアの施設では、利用者さんもスタッフも生き生きと暮らしていました。私も利用者さんがやりたいと願うことを一つでもかなえてあげられるようになりたい、悔いのないケアをしたいと、強く考えるようになりました」。海外研修での学びを、同僚や他の施設の職員たちにも伝えながら、認知症のケアに取り入れていきたいと意欲を見せます。

山際副主任はコミュニティホーム白石に4年間勤務した後、数カ月間介護の現場を離れたことがありました。その間に他の仕事を経験したからこそ、介護の仕事の魅力に気づくことができたといいます。「これからは介護の仕事のすばらしさを伝えながら、人を育てることも目標。そのためにより多くのことを学んでいきたい」と話します。自らの経験をもとに、笑顔と喜びのある介護の職場環境の実現をめざしています。



菊水こまちの郷
看護・介護課
副主任
山際 恵美子



Challenge 職員と家族の福利厚生を充実を図り、健康的に働けるようにする

Action

健診・検査と保健事業で職員・家族の健康を守る

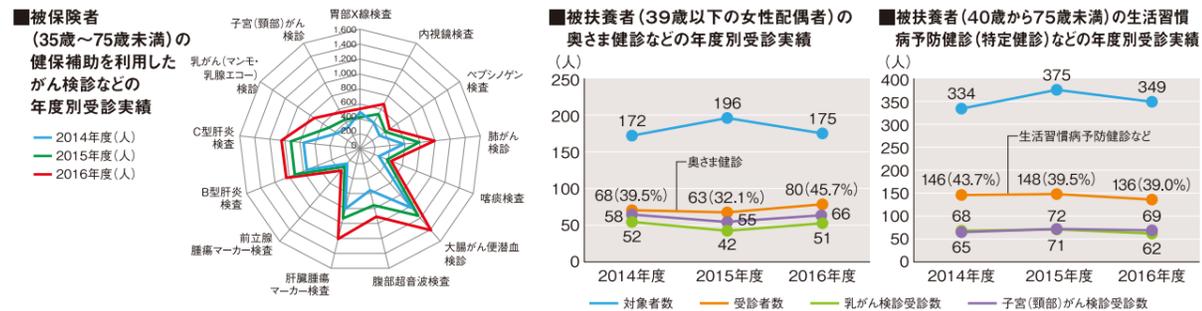
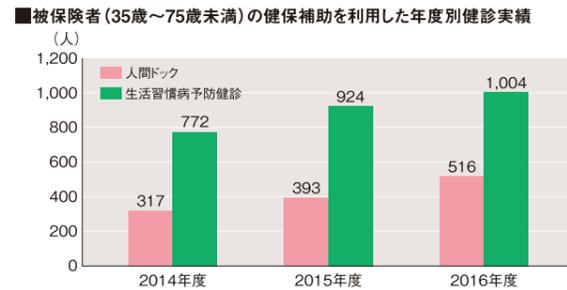
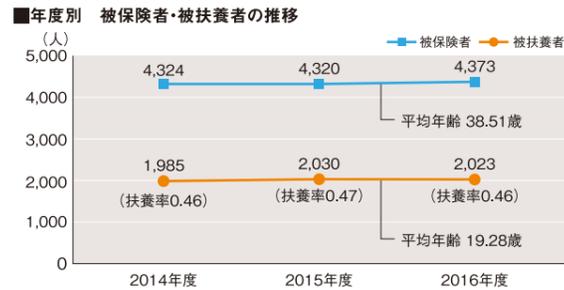
[溪仁会健康保険組合]

溪仁会健康保険組合には現在、関連会社を含めたグループ全職員とご家族6,627名が加入しています(2017年6月末現在)。毎年度、各事業所の定期健康診断の時期に合わせて、35歳以上75歳未満の職員(被保険者)に人間ドック・生活習慣病予防健診、各種がん検診の補助を実施しています。

ご家族(被扶養者)のうち40歳以上75歳未満の方は、職員と同様に生活習慣病予防健診に乳がん・子宮(頸部)がん検診を自己負担なく受けることができます。39歳以下の女性配偶者は「奥さま健診」として、健康診断項目に甲状腺機能・骨粗鬆症検査をプラスし、希望により乳がん・子宮(頸部)がん検診も自己負担なく受けられます。

これらの健診データの経年変化と、医療機関の受診実態を疾病別・傷病別に分析し、健康管理のPDCA*サイクルを回す「データヘルス計画」を、事業主と健保組合がコラボヘルスとして実践することが健康で元気の職場づくりにつながります。

※PDCAサイクル=Plan(計画)、Do(実行)、Check(評価)、Act(改善)を繰り返し、業務を継続的に改善する手法



理事長メッセージ



溪仁会健康保険組合 理事長 (溪仁会グループ最高責任者)

田中 繁道

『溪仁会健康保険組合』理事長就任にあたって

2017年7月に、溪仁会健康保険組合の理事長に就任いたしました。2009年10月に設立された健保組合を引き継ぐこととなり、その責任の重さを痛感しており、より効果的な職員の福利厚生事業の充実を図っていききたいと思います。

さて、わが国の少子高齢化や疾病構造の変化が進む中で、厚生労働省は生活習慣および社会環境の改善を通じて、国民の健康増進の総合的な推進を図っています。そこで2013年から2022年まで「二十一世紀における国民健康づくり」を推進し、日本に住む一人ひとりの健康の実現をめざしています。

そんな中、2017年度溪仁会グループ経営基本方針においても、健康経営基盤づくりとして「経営組織を支える人財の健康管理は、私たちの経営に直結する課題であり、実効性の高い職員健康管理体制の構築を図る」との方針を示しました。

これからも職員が安心・安全、かつ健康に働けるように、健康保険組合と各事業所との連携をより一層強化し、加入者に対する健康づくりや疾病予防といった保健事業を今まで以上に充実させてまいります。それによって溪仁会グループの「健康経営」の取り組みを積極的に進めていきたいと考えています。

Next Step

健診データを活用し、よりニーズに合う健康対策を実施

Challenge

職員の学びや業務の質向上へのモチベーションを高める

Action

「学ぶ風土・文化」を継承する溪仁会グループ研究発表会

[溪仁会グループ]

2016年11月5日、札幌コンベンションセンター(札幌市白石区)にて、第28回溪仁会グループ研究発表会を開催しました。今年には口演形式100題、ポスター形式13題の合計113演題が発表され、6年連続で100演題を超え、また参加者は、グループ内外から743名に達しました。

今回は、在宅支援や多職種連携に関わる研究や事例発表が多く、2025年を見据えて地域包括ケアシステムを現場から実践する意欲が強く示されました。また、研究発表のほか今回初めての試みとして、認知症の方や家族を温かく見守り支援する認知症サポーターを育成する「認知症サポーター養成講座」



ポスター発表の様子

を同時開催しました。職員同士が活発に意見を交換し、討論できる場として継続開催を予定しています。



認知症サポーター養成講座には33名が参加

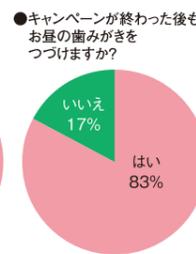
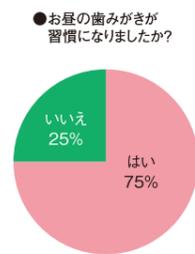
Next Step

研究成果をさらに肉付けし、全国学会や論文へと発展させる

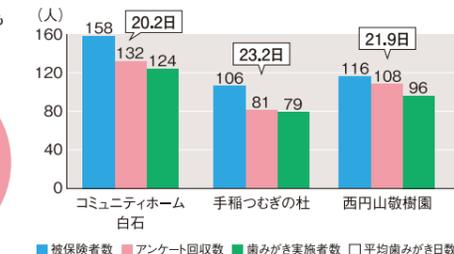
2016年度「お昼の歯みがきキャンペーン」

歯の生活習慣病といわれる「歯周病」は、糖尿病・心臓病・肥満などの生活習慣病やその他の病気にかかりやすくなり、病状を悪化させたりする原因となります。そのため「データヘルス計画」(保健事業)で歯周病予防の啓蒙活動を実施しています。

2015年度の歯科医療費を前年度と比較分析し、増加幅の大きい3事業所の被保険者全員に「歯みがきセット」を配付し、30日間食後の歯みがきを実行してもらいました。



キャンペーンから1年後の虫歯治療費は前年度比+165.69%、歯周病治療は+30.58%となりましたが、早期治療につながり、口腔ケアからの健康意識が向上しました。



Challenge

職員のキャリア形成や、知識・技能向上を支える

Action

グループを挙げ職員のキャリアアップ・ヒューマンスキル・マネジメントスキルを育む

[溪仁会グループ・社会福祉法人溪仁会]

溪仁会グループ本部主催研修

溪仁会グループでは、職員のことを人材ではなく「人財」と表記し、一人ひとりが誇りを持って働ける職場であることをめざしています。医療や福祉の制度が時代の流れに合わせて刻々と変わる中で、高い水準のサービスを提供していくためには、それぞれの職種の技能や知識だけでなく、チームワークで医療、保健、福祉を支える組織人・社会人としての力が必要となります。溪仁会グループでは、本部の主催によって、マネジメントスキルやコミュニケーションスキルなど、キャリア形成を図る研修体系となっています。また、役職者を対象として、時流に沿った政策や組織理念を共有する研修や、全職員を対象としてその時代や組織の中で話題として取り上げられた方々を講師にお迎えして研修を実施しています。

溪仁会グループ本部主催研修では、勤続年数や役職などにより必要な知識を学ぶ階層別研修を中心に、年代別のキャリアデザインに関する研修、テーマ別研修の3本の柱で実施しています。



中堅役職者研修の様子

■2016年度溪仁会グループ本部主催研修実績

名称	延べ参加人数
新人フォローアップ(6回)	239名
若手選抜者(3回)	115名
中堅選抜者(4回)	164名
新任役職者	28名
新任役職者フォローアップ	25名
メンタルヘルスクエア研修(役職者向け)	75名
中堅役職者(6回)	144名
看護管理者(2回)	126名
年代別キャリアデザイン研修I(20歳代)	94名
年代別キャリアデザイン研修II(50歳代)	17名
幹部職員セミナー	260名
職員合同研修会	361名
選抜者	30名
KMS内部監査員 養成基礎研修会	36名
KMS内部監査員 スキルアップ研修会	38名
目標管理(BSCの基本)研修会	34名

受講者アンケート Pick Up

- 目の前にある課題だけでなく、5年後、10年後、自分がどんなふうに住事をしていきたいかを考えて、今から仕事に取り組んでいきたいと感じました。そのための学習内容や必要な資格など、今から取得していけるようにしたいです(勤続2年・年代別キャリアデザインI)
- 結論やメリットを伝えることは部下の立場を考えると、大変必要なことであると思いました。話があちこち飛んでしまう自分にとって、順序立てて準備して伝える大切さを学ぶことができました(勤続8年・中堅役職者研修会B「プレゼンテーション実践編」)
- 多職種連携といっても曖昧な感じでしたが、連携の仕方の一つがわかりました。組織としても個人としてもゴールはまだ先ですが、できることを一歩ずつ進めたいです。「多職種」なので医師も参加いただければいいと思いました(選抜者研修会「IPW・多職種連携」)

社会福祉法人溪仁会主催研修

社会福祉法人溪仁会では、介護や福祉の現場で必要とされる知識・技能の獲得をめざした法人主催の研修を開催しています。各職場における新人・ユニットリーダー・中堅管理職といった階層別の研修に加え、介護に関わる専門知識や医療との連携についての研修や、倫理的思考や精神力の向上につながる研修など、テーマ別の研修も全施設を対象として行っています。遠隔地の事業所とはインターネット回線を利用したライブ中継を行い、どこに勤務していても参加しやすいよう工夫しています。また、テーマ別研修は医療法人溪仁会や関連会社からの参加も受け入れています。

■2016年度社会福祉法人溪仁会主催研修実績

名称	回数	延べ参加人数
メンタルヘルス対策	1回	44名
地域連携とチーム連携の理解	1回	28名
アンガーマネジメント	1回	51名
地域の訪問診療医活用	1回	18名
認知症の自立にむけた研修会	1回	32名
介護力向上	1回	19名
業務改善のための質問力	1回	22名
認知症倫理	1回	29名
ハラスメント防止	1回	26名
衛生管理研修	1回	18名
新入職員研修・新入職員フォローアップ	6回	80名
ユニットリーダー研修	4回	40名
中堅管理職講座	8回	178名

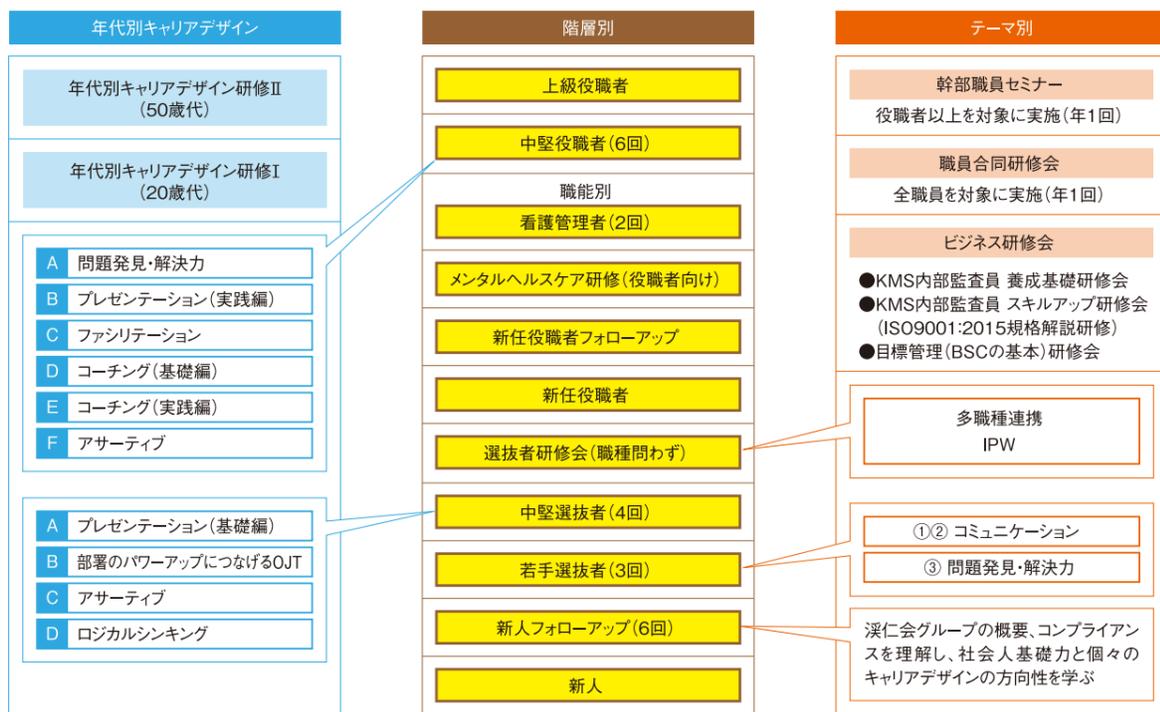
受講者アンケート Pick Up

- 「怒り」にうまい・下手という発想がなかった。必要のあるときは上手に怒れ、必要のないときは怒らないようにという考え方はためになりました(アンガーマネジメント研修会)
- 最近、自分は怒らなくなったと思っていました。年を取ると「べき」と思うことが少なくなってきて、何でも許せるようになってきています。だからこそ自分の中で「ここは怒るところ」と逆に思うようにしないとダメだと思いました(アンガーマネジメント研修会)
- 情報共有の改善は進んでいますが、今日の研修を活かし、利用者さんのためのサービス提供をしていく(介護力向上研修会)
- 現場での困りごとを具体的に話していただき、わかりやすかった(介護力向上研修会)

Next Step

参加者の声を反映し、より職員・組織に合った研修を開催する

■2016年度溪仁会グループ本部主催研修体系表



Challenge

身体への負担が大きい介護業務の負担軽減

Action

介護ロボット・介護機器導入による職員の負担軽減

[社会福祉法人溪仁会ほか]

今後高齢者が急増していく中で、介護に従事する人の身体的負担をいかに軽減するかが課題となっています。そこで注目されているのが介護ロボットをはじめとした、先進技術を活用した介護機器です。これらの新しい機器の普及には、現場視点での適切な性能評価を製造元へフィードバックし、安全な利用方法を確立して、実用化をさらに進める必要があります。

2016年度、手稲つむぎの杜では国の補助金を利用し、移乗用リフト型ロボットを1台導入しました。これにより通常2名で行っていた介助が女性1名で可能となり、職員の負担軽減へとつながりました。また、菊水こまちの郷では、入浴介助時に腰補助用マッスルスーツを使用し、業務の身体的負担の軽減を図っています。医療法人では、定山溪病院で歩行アシスト装置の勉強会を行うなど、先端機器導入に向けた検討を始めました。

2017年度から、手稲つむぎの杜は北海道の委託を受けた「北海道介護ロボット普及推進センター」として、介護ロボットの展示・体験を実施しています。介護の現場に機器の普及が進むよう、必要な情報の提供を続けていきます。



手稲つむぎの杜に導入した移乗用リフト型ロボット

Next Step

介護ロボットの導入効果を含めた情報を地域に提供し、普及を進める

Challenge

職員の仕事の大切さを職員のご家族に伝える

Action

働く姿を伝え親子の絆へ「こども参観日」を開催

[社会福祉法人溪仁会]

2016年7月28日に、きもべつ喜らめきの郷で初の取り組みとなる「こども参観日」を開催しました。このイベントは、職員のお子さんを施設に招き、未来を担う次世代が社会福祉への理解と興味を持つ機会をつくることを狙いとしています。また、普段家庭では見られない親の働く姿を見せることで、親子の絆を深めることも目的としています。

当日は4歳から17歳まで、11名のお子さんが参加しました。施設でいつも提供されている昼食を取った後、職員同士で扱う無線や、送迎車についているリフトを利用する体験などを実施。さらに、施設内のユニットでは、利用者さんと一緒にわたあめやかき氷を楽しみました。

参加したお子さんから好評だったほか、職員からも「自分の仕事を見直す良い機会になった」と感想がありました。



参加したお子さんたち

Next Step

イベントの開催を定着させ、介護・福祉の仕事の大切さを伝える

Column CSRの未来へ②

質の高いサービスを支える溪仁会マネジメントシステム

内部監査で適切な運用を維持
組織の使命を共有し、質の向上をめざす

溪仁会グループでは、品質・環境に関する国際マネジメント規格(ISO)や個人情報保護に関するプライバシーマークなど、さまざまな第三者評価を導入し、誠実な組織活動に役立ててきました。こうした各種マネジメント規格を、より当グループの活動に即した内容に統合・再編したものが「溪仁会マネジメントシステム(KMS)」です。KMSは2011年度から運用が始まり、当グループが提供する医療・保健・福祉サービスの質の向上や業務改善などを図る上でのガイドラインとなっています。

KMS活動の中心の一つが、職種や部署の枠を超えて、業務の適正性を互いに確認する「内部監査」です。当グループでは、年に1回の内部監査で業務手順を確認し、必要に応じて改善を図っています。

内部監査は「KMS内部監査員養成基礎研修会」を受講し、資格を取得した「内部監査員」によって行われます。当グループはこの内部監査員の養成を重視し、これまでに500名以上が資格を取得しています。今年度は研修内容の大幅な見直しにより実践的に学ぶ形式にしました。監査前日までにを行うことや監査の実際の流れなどのシミュレーションを、ケーススタディを用いて



2017年度KMS内部監査員養成基礎研修会の担当講師。右から、定山溪病院総務課稲村和彦主任、溪仁会法人本部経営企画部KMS事務局永谷翔主任、溪仁会円山クリニック保健事業部栄養指導科佐藤きぬ子科長

KMSへの理解を深め、普及を図る取り組み

職員へのKMSの浸透と業務における有効な運用を促進するために、各施設ではさまざまな取り組みを行っています。

手稲溪仁会病院では、大野和則副院長が品質管理責任者としてKMSに携わり、医療現場の実状に即した体制づくりに取り組んでいます。医師がリーダーとなってKMSの推進を行うことで、スムーズに現場へ浸透し、業務の質のさらなる改善につながっています。

定山溪病院では職員向けに『ISOニュース』を毎月発行しています。品質文書の改訂内容の紹介や溪仁会グループ行動基準



各病院や組織から代表者が集まるKMS会議

実施。内容を深く掘り下げた答えが出るなど、具体的な理解に役立ったようでした。受講者からも「監査の流れがイメージでき、わかりやすかった」と、評価する声が聞かれました。

溪仁会法人本部経営企画部KMS事務局の永谷翔主任は、「楽しく研修を受ける中で、しっかりとKMSや監査の目的を理解してもらおうと考えました。具体的なプロセスを体験してマネジメントの考え方を知ること、さらなる業務の効率性、有効性の向上や改善について考えるきっかけになれば」と語ります。

KMSの中核であるISO9001が2008年版から2015年版へ改訂され、要求事項も一部変更されました。業務レベルでは改訂の影響は少なかったものの、管理レベルでは経営との連動やプロセスアプローチの強化など、整理が必要となる部分もありました。なお、当グループでは2017年10～11月に認証登録規格的移行審査を受審しています。

「KMSの考え方はKMS会議メンバーの協力もあり、かなり現場に浸透してきました。これからは職員一人ひとりの活躍がどのようにして溪仁会グループの社会的使命を果たすことにつながっているのかを分かりやすく伝えていきたい」と永谷主任。マニュアルの工夫などを含めて、KMSの効果的な運用を図る活動を継続していきます。



定山溪病院で発行されている『ISOニュース』

の解説、ISO9001規格改訂の解説など、KMSの基本的な内容をわかりやすく紹介しているのが特徴です。具体的な業務と照らし合わせて読むことで、さらに理解を深めることができます。

こうした活動によって、職員一人ひとりがKMSの意図を理解し、日常の業務に活かせるようにすることで、KMSがグループ全体に根付くことをめざしています。

環境への取り組み

地球環境や地域の環境に配慮することは、すべての事業者課せられた大きな責任です。 溪仁会グループでは、職員一人ひとりの環境意識の向上を重視し、さまざまな環境活動を行っています。

排気ガスの発生しない車両で地域の診療へ

定山溪病院に電気自動車を導入

地域に密着した診療の必要が増す中で、病院でも車両を利用する場面は増えています。株式会社日産自動車は地球温暖化対策として排気ガスの発生しない電気自動車の普及に取り組んでおり、その一環として電気自動車「e-NV200」の無償貸与プロジェクト「PRモニターキャンペーン」を展開しています。定山溪病院がそのモニターに選ばれ、2017年3月7日に贈呈式が行われました。e-NV200は3年間無償提供され、定山溪病院では患者さんの歯科への送迎や訪問診療に使用しています。患者さんからは「乗り心地が良く、音も静か」と好評です。



「湯の街清掃」にもe-NV200と共に参加

職員環境活動を表彰し、共有する

第3回 溪仁会グループ エコびとエコもの表彰

溪仁会グループでは、2014年から職員が実践している環境活動を発表し、グループの模範となる取り組みを表彰する「Fun to Eco Project～エコびとエコもの表彰～」を行っています。第3回となった今回は、環境負荷を低減する活動を数値化する「削減効果数値化部門」、環境保全活動をPRする「エコ活動PR部門」、環境保全につながる業務改善活動をPRする「業務改善と環境保護の連動部門」の3部門が設けられました。全10チームの取り組みがエントリーされた中から、3部門それぞれで優秀賞が選ばれたほか、最も優れた取り組みとして定山溪病院作業療法科環境ワーキングチームに最高責任者賞が贈られました。



エコびとエコもの表彰はグループ研究発表会(P47参照)時に表彰されました

最高責任者賞 作業療法科環境WTによる環境への取り組み

～スコアカードの活用と地域とのつながり～

子育て世代の職員からおもちゃ・衣類のリユースについて意見があったことで取り組みがスタートしました。衣料メーカーのリサイクル活動を知り部署内で回収を行い、それ以外の一般古着は札幌市指定クリーニング店へ持ち込み。おもちゃも集めて地域の児童会館へ寄贈しました。リユース活動以外にもマイ箸の使用など職員個人の行動に関する活動、ペーパーレス化や節電など業務に関する活動を設け、スコアカードを活用してそれらの活動の進捗管理を可視化し、部署職員で成果を共有できるように進めました。



優秀賞

- 削減効果数値化部門
雑紙回収で一般廃棄ゴミの削減を!!! (溪仁会円山クリニック)
- エコ活動PR部門
ラク楽バック隊 (コミュニティホーム白石)
- 業務改善と環境保護の連動部門
昔取った杵柄! 利用者様と雑巾を作って幼稚園に寄付する活動 (コミ白婦人部/コミュニティホーム白石)

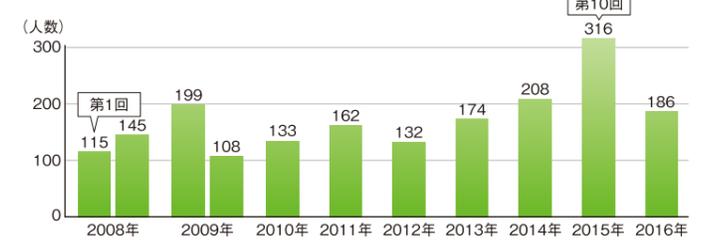
環境保護活動を通じてコミュニケーション、地域社会にも貢献

おたるドリームビーチ清掃活動

溪仁会グループではCSR活動の一環として、2008年度より職員やその家族、関係者、学生有志などが集まり、海水浴シーズン前の浜辺を清掃する取り組みを行っています。2016年度は6月18日(土)に手稲溪仁会医療センター主催で第11回目となる清掃活動を実施しました。参加者は田中繁道理事長をはじめ、職員109名、家族ほか77名の合計186名となりました。当日はあいにくの荒天でしたが、45リットルのゴミ袋215袋分のゴミを集めることができました。本活動は今後も継続し、交流を通じてグループ内連携の意識を高めつつ、地域社会との協働意識も育んでいきたいと思ひます。



●おたるドリームビーチ清掃活動参加者



利用者さんも加え、親睦を深めながら森づくり

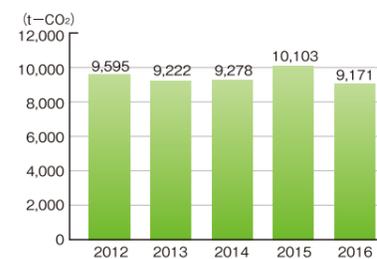
社会福祉法人溪仁会 植樹会

2016年9月10日、第5回目となる社会福祉法人溪仁会の植樹会が、当別町の道民の森・神居尻地区で行われました。この植樹会は「カミネコン」と呼ばれる植栽用ポットを利用したもので、2012年より毎年続けられています。カミネコンは、各施設の利用者さんに組み立てにご協力いただくことで、職員だけでなく利用者さんにもかわりを持っていただくイベントです。今回は、社会福祉法人溪仁会の職員と家族に、初めて溪仁会円山クリニックの有志を加え、75名により300本の若木を植樹しました。同時に子ども向けの森づくり教室なども行い、環境意識を高め親睦も深まる一日となりました。5年間で植えた木の本数は1,056本となりました。

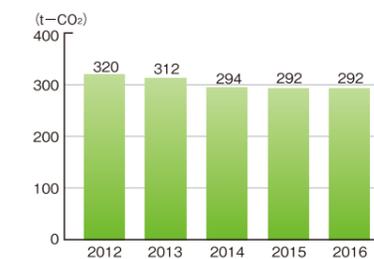


環境データ

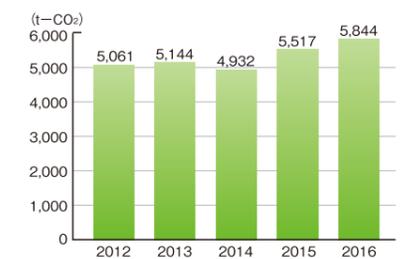
●電気使用量



●車両燃料(ハイオクレギュラーガソリン軽油)



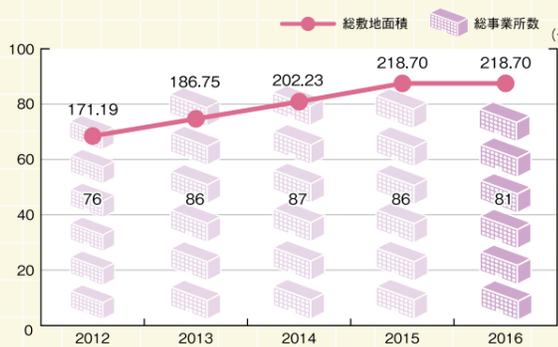
●建物設備維持燃料(都市ガス・灯油・A重油・LPG)



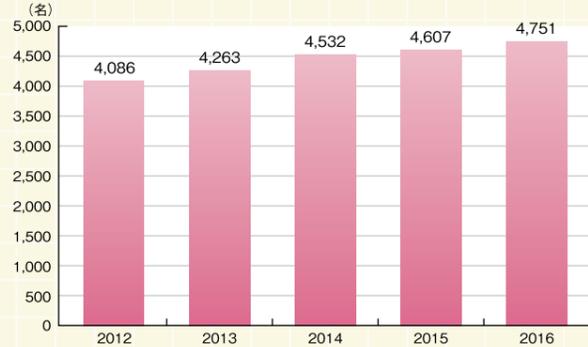
数字で読み解く 溪仁会グループ

基本データ編

● 総事業所数と総敷地面積

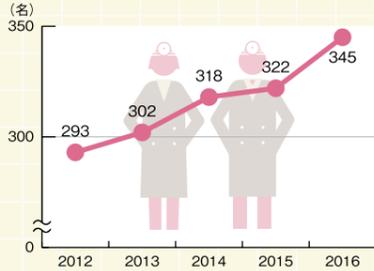


● グループ職員総数の推移

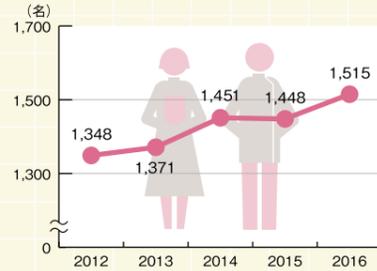


グループ職員数の推移詳細

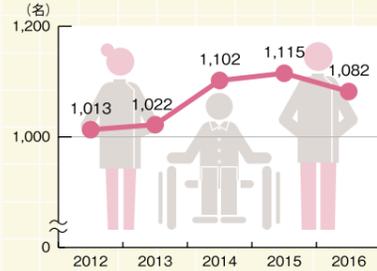
● 医師数



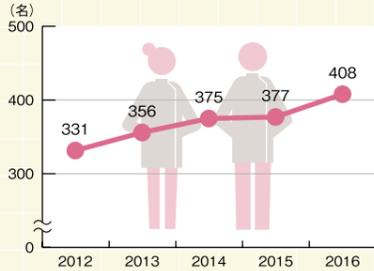
● 看護職員数



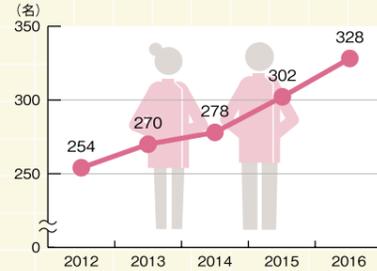
● 介護職員数



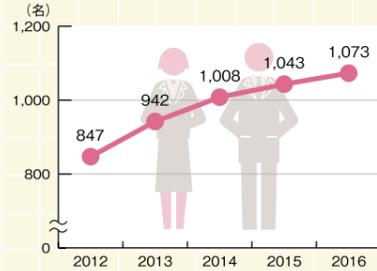
● セラピスト数



● それ以外の医療資格者数

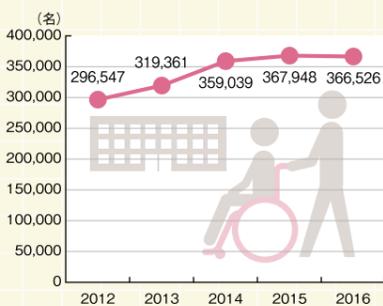


● 事務職員その他

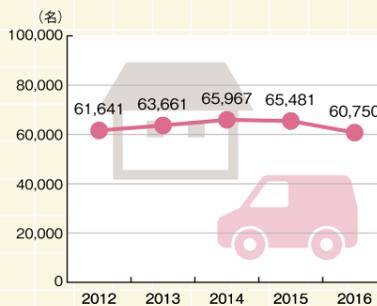


介護・福祉のデータ編

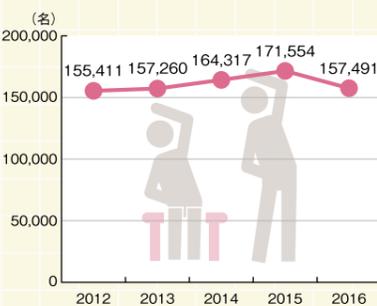
● 施設入所者数



● 訪問サービス利用者数



● 通所サービス利用者数



※社会福祉法人溪仁会全体の延べ人数総計

※社会福祉法人溪仁会全体の延べ人数総計
※在宅サービス:訪問介護・訪問看護・訪問リハ

※社会福祉法人溪仁会全体の延べ人数総計
※通所サービス:通所介護・通所リハ

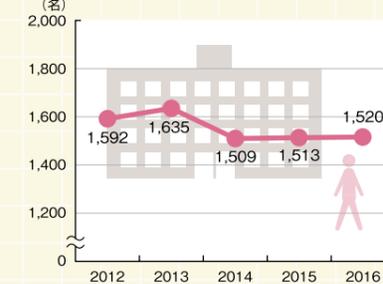
溪仁会グループの活動にまつわるさまざまな数字をご紹介します。

医療・保健のデータ編

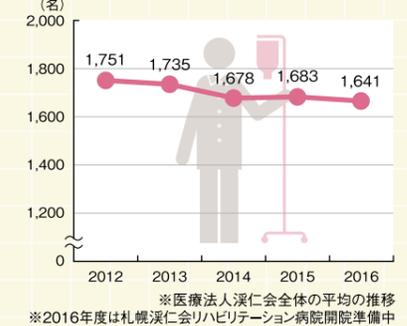
● 総ベッド数



● 1日あたりの外来患者数



● 1日あたりの入院患者数



● 健診・オプション検査の受診数 (溪仁会円山クリニック)



● ドクターヘリ出動件数

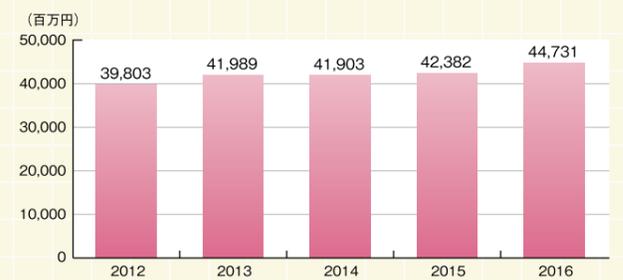


財務のデータ編

● 2016年度の各法人の収益 (単位: 百万円)

医療法人溪仁会	経常収益	36,759
社会福祉法人溪仁会	経常収益	7,024
その他関連法人 (株式会社ソーシャル、 医療法人福生会 など)	経常収益	948

● グループ経常収益



● 医療法人溪仁会 経常収益



2013年:喜茂別町立クリニック開院(指定管理者)

● 社会福祉法人溪仁会 経常収益



2012年:岩内ふれ愛の郷移管 2013年:きもべつ喜らめきの郷開設
2014年:手稲つむぎの杜、るすつ銀河の杜開設

各事業所の数字

手稲溪仁会病院

治療とケア

- 外来延べ患者数 **177,174名**(1日平均712名)
- 入院延べ患者数 **207,583名**(1日平均569名)
- 平均在院日数 **10.4日**
- 病床稼働率 **80.1%**
- チーム医療
クリニカルパス施行数 7,938件(施行率43.5%)
クリニカルパス種類 214種類(2017年3月末現在)
栄養食事指導件数 外来2,833件/年 入院6,932件/年
NST(栄養サポートチーム)介入延べ患者数 2,389件/年
服薬指導件数 14,690件
リハビリテーション実施単位数(入院・外来合計) 272,859
- 救急医療
救急患者数 **21,127名**(内救急車、ヘリ搬送患者数5,297名)

手稲溪仁会クリニック

治療とケア

- 外来延べ患者数 **121,404名**(1日平均488名)
- 職員数 **88名**

札幌西円山病院

リハビリと療養

- 外来延べ患者数 **28,899名**(1日平均118.9名)
年齢別外来患者割合 50歳未満35.3%、50～60歳未満8.4%、60～70歳未満13.2%、70～80歳未満14.3%、80～90歳未満19.1%、90歳以上9.4%
- 入院延べ患者数 **248,080名**(1日平均679.6名)
- 入院患者平均年齢 **81.7歳**
- 患者分類別状況(入院)
医療療養病床 医療区分1・7.7%/医療区分2・54.5%/医療区分3・37.8%
- 地域別患者数
札幌市内535名(中央区188名、西区97名、その他250名)、石狩21名、後志15名、空知18名、胆振・日高14名、その他道内28名、道外2名
- リハビリテーション実施単位数(入院) **503,165**(医療保険462,316/介護保険40,849)
- 訪問リハビリテーション実施単位数 **37,936**(医療保険21,813/介護保険16,123)
- デイケア延べ利用者数 4,249名(4月～9月)
- 職員数 **890名**

溪仁会円山クリニック

保健

- 健診受診者数とその比率
人間ドック17,823名(37%)、生活習慣病健診11,598名(24%)、一般健診8,258名(17%)、巡回健診9,742名(21%)
- オプション検査数内訳
婦人科検査(乳がん、子宮がん、卵巣がん)15,601名、CT検査(頭部、胸部、腹部)4,256名、その他(胃内視鏡、腫瘍マーカー、骨粗しょう症検査)37,405名

泊村立茅沼診療所

地域医療

- 外来延べ患者数 **8,053名**
- 保健予防活動 **1,374名**
予防接種 1,302名
生活習慣病健診 1名
特定健診 9名
特定健康診査事後(血液検査) 9名
肺がん検診 3名
各種ドック検診(脳、腹部、心臓) 13名
- 職員数 **8名**

- 診療関連
年間手術件数 **8,007件**(手術室で行われた手術すべての数)
難易度別手術割合・高難度(E)1.7%、中難度(C-D)94.3%、低難度(A-B)4.0%
年間消化器内視鏡検査数 13,823件
- 周産期医療
年間分娩件数 526件
NICU稼働率 75.4%(他病棟転出患者含む)
- 地域医療連携(連携医療機関数) **520件**
連携登録医師数 591名
患者紹介率/逆紹介率 75.5%/62.7%
- 職員数 **1,758名**

手稲家庭医療クリニック

治療とケア

- 外来延べ患者数 **22,734名**
- 入院延べ患者数 **5,344名**
- 訪問診療(往診含)延べ患者数 2,611名
- 看取り患者数 病棟104名/在宅47名
- 予防接種実施人数 2,833名
- 栄養指導実施数 1,315件
- 訪問看護延べ利用者数(はまなす訪問看護ステーション) 12,404名
- 職員数 **58名**

定山溪病院

リハビリと療養

- 外来延べ患者数 **11,837名**
- 入院延べ患者数 **138,041名**
- 入院患者平均年齢 **74.0歳**
年齢別入院患者割合 50歳未満7.9%、50～60歳未満8.7%、60～70歳未満17.4%、70～80歳未満24.5%、80～90歳未満28.0%、90歳以上13.5%
- 地域別患者数
札幌市内291名(南区149名、その他142名)、後志26名、空知16名、上川3名、留萌4名、宗谷1名、網走2名、胆振3名、日高1名、釧路1名、道外2名
- リハビリテーション実施単位数(入院) 176,903
- 訪問リハビリテーション実施単位数 15,603
- デイケア延べ利用者数 4,058名
- 介護予防啓発普及事業(介護予防センター定山溪)
開催回数 **103回**
延べ参加者数 **1,656名**
- 職員数 **350名**

喜茂別町立クリニック

地域医療

- 延べ患者数 **10,689名**(外来8,731名、在宅63名、施設1,895名)
- 保健予防活動 **2,095名**
予防接種 1,593名
事業所健診 67名
バースデイ健診 93名
学校内科健診 134名
学校心臓健診 20名
保育園健診 96名
乳幼児健診 92名
- 職員数 **7名**

西円山敬樹園

介護

- 平均要介護度 **3.4(入所)**
- 1日当たり実績
入所 115.4名/日(定員123名)
グループホーム西円山の丘 26.1名/日(定員27名)
短期入所生活介護 9.1名/日(定員14名)
通所介護 19.9名/日(定員30名)
訪問介護 19.6回/日
ケアセンターこころ 16.8回/日
- 居宅介護支援 延べ1,263件
ケアプランセンターこころ 延べ735件
- 介護予防センター延べ相談件数 円山103件、曙・幌西140件
- 研修参加・実施状況
外部研修 参加123回
内部研修 開催47回(その他各部署にて実施)
- 職員数 **159名**

月寒あさがおの郷

介護

- 平均要介護度 **4.0(入所)**
- 1日当たり実績
入所 75.3名/日(定員80名)
短期入所生活介護 2.8名/日(定員8名)
通所介護 35.8名/日(定員45名)
- 研修参加・実施状況
外部研修 法人本部・溪仁会グループ主催研修延べ173名、北海道抑制廃止研究会などで発表
内部研修 認知症学習会延べ33名、褥瘡予防研修20名など
- 職員数 **95名**

きもべつ喜らめきの郷

介護

- 平均要介護度 **3.5(入所)**
- 1日当たり実績
入所 77.9名/日(定員80名)
訪問介護 1.9回/日
- 研修参加・実施状況
外部研修 参加63回、延べ114名参加、全道老人福祉施設研究大会、認知症介護実践研修など
内部研修 開催20回、延べ835名参加(るすつ銀河の杜と合同)、看取りケア、リスクマネジメントなど
- 職員数 **60名**

岩内ふれ愛の郷

介護

- 平均要介護度 **3.4(入所)**
- 1日当たり実績
入所 51.1名/日(定員50名)
短期入所生活介護 6.4名/日(定員10名)
- 研修参加・実施状況
外部研修は全老健、後志老協開催の講座などに参加、内部研修は事故発生防止など毎月テーマを設け開催
- 職員数 **38名**

コミュニティホーム白石

社会復帰・生活支援

- 平均要介護度 **2.9(入所・コミュニティホーム白石のみ)**
- 1日当たり実績
入所 94.9名/日(定員100名)、白石の郷 17.2名/日(定員18名)
短期入所生活介護 16.68名/日(定員19名)
通所介護 白石の郷38.6名/日(定員55名)
通所リハビリテーション 39.0名/日(定員50名)
訪問介護 28.5回/日
訪問リハビリテーション 2.0回/日

手稲つむぎの杜

介護

- 平均要介護度 **4.1(入所)**
- 1日当たり実績
入所 79.6名/日(定員80名)
短期入所生活介護 7.8名/日(定員10名)
通所介護 55.9名/日(定員65名)
認知症対応型通所介護 9.8名/日(定員12名)
- 居宅介護支援 延べ1,779件
- 介護予防センター延べ相談件数 71件
- 障がい相談支援事業 5,512件
- 研修参加・実施状況
外部研修 参加105回、延べ249名参加、全道老人福祉施設研究大会など
内部研修 開催28回、延べ467名参加、介護ロボット導入研修、認知症ケアと地域包括ケアシステム研修などを実施
- 職員数 **132名**

菊水こまちの郷

介護

- 平均要介護度 **4.5(入所)**
- 1日当たり実績
入所 27.9名/日(定員29名)
小規模多機能型居宅介護 27.5名/日(登録定員29名)
認知症対応型通所介護 0.1名/日(定員3名)
- 研修参加・実施状況
外部研修 参加52回、延べ65名参加、認知症介護実践者研修、特養看護と介護の連携協働研修など
内部研修 開催13回、延べ259名参加、接遇、リスクマネジメント、認知症の理解など
- 職員数 **42名**

るすつ銀河の杜

介護

- 平均要介護度 **3.0(入所)**
- 1日当たり実績
入所 28.2名/日(定員29名)
通所介護 6.15名/日(定員10名)
- 居宅介護支援(2017年1月1日～) 延べ107件
- 研修参加・実施状況
外部研修 参加30回、延べ39名参加(内容はきもべつ喜らめきの郷と同様)
内部研修 きもべつ喜らめきの郷と合同
- 職員数 **33名**

コミュニティホーム岩内

社会復帰・生活支援

- 平均要介護度 **2.9(入所)**
- 1日当たり実績
入所 99.3名/日(定員100名)
通所リハビリテーション 40.7名/日(定員50名)
訪問看護 12.6名/日
- 居宅介護支援 延べ311件
- 地域包括支援センター延べ相談件数 164件
- 研修参加・実施状況
新入職員研修6名、認知症介護実践者研修1名など延べ31名参加
- 職員数 **149名**

ISO26000対比表

溪仁会グループでは、社会的責任の国際規格であるISO26000を手引きとして、より確実にCSR経営を実行することをめざしています。CSRレポート2017に掲載した取り組みを、7つの中核主題に分類すると以下の通りになります。

中核主題	課題	溪仁会グループ 行動基準項目	取り組み内容
組織統治	組織統治	すべて	溪仁会グループの社会的使命(P06) 溪仁会グループの事業理念(P07) Column CSRの未来へ①(P25)、②(P51)
人権	課題1: デューディリジェンス 課題2: 人権に関する危機的状況 課題3: 加担の回避 課題4: 苦情解決 課題5: 差別及び社会的弱者 課題6: 市民的及び政治的権利 課題7: 経済的、社会的及び文化的権利 課題8: 労働における基本的原則及び権利	③人権尊重	Human Story 5(P42) Close Up 誰もが生き生きと活躍できる組織へ(P44)
労働慣行	課題1: 雇用及び雇用関係 課題2: 労働条件及び社会的保護 課題3: 社会対話 課題4: 労働における安全衛生 課題5: 職場における人材育成及び訓練	⑥教育研修 ⑪職場環境	Human Story 6(P43) 健診・検査と保健事業で職員・家族の健康を守る(P46) 「学ぶ風土・文化」を継承する溪仁会グループ研究発表会(P47) グループを挙げ職員の キャリアアップ・ヒューマンスキル・マネジメントスキルを育む(P48) 介護ロボット・介護機器導入による職員の負担軽減(P50) 働く姿を伝え親子の絆へ「こども参観日」を開催(P50)
環境	課題1: 汚染の予防 課題2: 持続可能な資源の利用 課題3: 気候変動の緩和及び気候変動への適応 課題4: 環境保護、生物多様性、及び 自然生息地の回復	⑩環境保護	定山溪病院に電気自動車を導入(P52) 第3回溪仁会グループ エコびとエコもの表彰(P52) おたるドリームビーチ清掃活動(P53) 社会福祉法人溪仁会 植樹会(P53) 溪仁会グループの環境データ(P53)
公正な事業慣行	課題1: 汚職防止 課題2: 責任ある政治的関与 課題3: 公正な競争 課題4: バリューチェーンにおける社会的責任の推進 課題5: 財産権の尊重	④順法精神	
消費者課題	課題1: 公正なマーケティング、事実に即した 偏りのない情報、及び公正な契約慣行 課題2: 消費者の安全衛生の保護 課題3: 持続可能な消費 課題4: 消費者に対するサービス、 並びに苦情及び紛争の解決 課題5: 消費者データ保護及びプライバシー 課題6: 必要不可欠なサービスへのアクセス 課題7: 教育及び意識向上	①顧客満足 ②品質管理 ⑤技術変革 ⑦チームワーク ⑧情報公開 ⑫個人情報保護	巻頭特集 地域と手を携えながら新たな医療の姿を描く 札幌溪仁会リハビリテーション病院の挑戦(P08) Human Story 1(P14)、2(P15) Close Up 専門性の高い認知症ケアの実現をめざして(P16) 地域の中核病院として信頼を高める手稲溪仁会病院の取り組み(P18) 専門的な診療機能を高める札幌西円山病院の取り組み(P19) 地域に密着した質の高い慢性期医療・ケアをめざす定山溪病院の取り組み(P20) 働く人々の健康を支える溪仁会円山クリニックの取り組み(P21) 切れ目のないケアで在宅療養の安心を支える取り組み(P22) 手稲溪仁会病院DMATが熊本地震に出勤(P23) 給食の質向上をめざし、コンテストに参加(P23) 「小規模多機能型居宅介護おおば」開設(P24) ホームヘルパーの質向上に向けた外部講師を招いての講習(P24) ステーキホルダーダイアログ(P26)
コミュニティへの 参画及び コミュニティの 発展	課題1: コミュニティへの参画 課題2: 教育及び文化 課題3: 雇用創出及び技能開発 課題4: 技術の開発及び技術へのアクセス 課題5: 富及び所得の創出 課題6: 健康 課題7: 社会的投資	⑨地域重視	Human Story 3(P30)、4(P31) Close Up 医療や福祉の世界と地域をつなぐ取り組み(P32) 「生活の場での看取り」をテーマに地域公開講座を開催(P34) 医療が必要な子どもたちの在宅生活を支える体制へ(P35) 利用者さんに楽しい時間を提供する喫茶ボランティア(P36) 障がい者と共に生きるための「地域づくり」活動(P36) 過疎地域の自治体と連携し、健康プログラムを開発・提供(P37) イベント感覚で気軽にかん検診&健康チェック「まちけん」を開催(P37) 台湾作業療法士協会が来訪(P38) 手稲溪仁会デイサービス織彩「RUN伴」へ参加(P38) 「いきいき健康体操」が映像コンクールで入選(P39) 「手稲ふれあいフェスティバル」で在宅医療の講演を実施(P39)

コミュニティホーム八雲 社会復帰・生活支援

- 平均要介護度 **3.2**(入所)
- 1日当たり実績
入所 88.0名/日(定員90名)
通所リハビリテーション 28.0名/日(定員45名)
訪問リハビリテーション 10.2名/日
訪問介護 5.6回/日
- 居宅介護支援 延べ1,181件
- 研修参加・実施状況
外部研修・・・参加67回、延べ102名、抑制廃止研修会、介護福祉士実習指導者養成研修などに参加
内部研修・・・開催8回、延べ332名、感染管理研修、コミュニケーション研修など
- 職員数 **85名**

カームヒル西円山 社会復帰・生活支援

- 平均要介護度 **1.2**(入所)
- 1日当たり実績
入所 97.9名/日(うち特定入居者41.3名/日、定員100名)
- 研修参加・実施状況
25回、延べ119名参加、外部は全国軽費老人ホーム協議会など、内部は高齢者虐待防止研修など
- 職員数 **19名**

おおしまハーティケアセンター 生活支援・通所介護

- 平均要介護度 **1.8**(通所介護)
- 1日当たり実績
短期入所 9名/日(定員9名)
通所介護 26名/日(定員30名)
訪問介護 6名/日
- 居宅介護支援 延べ100件
- 気仙沼市大島地域包括支援センター延べ相談件数 398件
- 地域交流
ミニデイ3地区35名参加、公民館祭りにて介護相談会など
- 職員数 **37名**

円山ハーティケアセンター 生活支援・通所介護

- 平均要介護度 **1.2**(通所介護)
- 1日当たり実績
通所介護 62.4名/日(定員75名)
- 居宅介護支援 延べ2,413件
- 障がい者相談支援事業 268件
- 研修参加・実施状況
外部は認知症学習会、ミドルマネジャー養成ゼミなどに参加、内部は移動・移乗介助などを実施
- 職員数 **47名**

医療法人稲生会 身体障がい者支援

- 延べ患者数 **166名/月**
- 訪問診療延べ患者数 **151名/月**
- 地域別患者数
札幌市 131名/月
その他 20名/月
- 訪問看護 379.1件/月(月内での同一患者含む)
- 訪問介護 40.5件/月(月内での同一患者含む)
- 医療型短期入所 122件/月(月内での同一患者含む)
- 職員数 **48名**

コミュニティホーム美唄 社会復帰・生活支援

- 平均要介護度 **2.6**(入所)
- 1日当たり実績
入所 79.2名/日(定員80名)
通所リハビリテーション 44.6名/日(定員55名)
- 研修参加・実施状況
内外合わせて46回、延べ84名参加。溪仁会グループ研修会、老健協主催研修会など
- 職員数 **96名**

美唄市東地区生活支援センター すまいる 生活支援・通所介護

- 平均要介護度 **1.6**(通所介護)
- 1日当たり実績
通所介護 18.4名/日
訪問介護 48.7名/日
- 居宅介護支援 延べ1,576件
- 福祉入浴 2,312名
- 高齢者世話付き住宅生活援助員派遣事業 4,228件
- 研修参加・実施状況
集合研修延べ14名参加、内部研修延べ420名参加、訪問介護事業所内研修月1回、通所介護・居宅介護事業所内研修会2カ月に1回
- 職員数 **45名**

青葉ハーティケアセンター 生活支援・通所介護

- 平均要介護度 **1.5**(通所介護)
- 1日当たり実績
通所介護 41.8名/日(定員65名)
訪問看護 16.1名/日
小規模多機能型居宅介護 15名/日(定員29名)
- 居宅介護支援 延べ1,611件
- 研修参加・実施状況
ケアプラン作成研修、ケースカンファレンス、他職場内研修等実施
- 職員数 **53名**

株式会社ソーシャル 在宅支援・生活支援

- 訪問介護利用者 **3,520名**(月平均293.3名)
延べ利用回数 32,889回(月平均2,740回)
- 介護予防訪問介護利用者 4,701名(月平均391.7名)
- 職員数 **20名**

人と社会を支え続けるという使命を果たし 「あるべきすがた」の実現をめざす

溪仁会グループ最高責任者
医療法人溪仁会 理事長

田中繁道

中期経営ビジョンのもとで 未来に向けた挑戦が始まる

2016年は溪仁会グループの新たな中期経営ビジョン「ビジョン溪仁会2020」が始動した年でした。「ビジョン溪仁会2020」は、2025年を見据えて組織の「あるべきすがた」を示し、2020年までにそれを構築しようという5カ年の経営計画です。各病院や施設、事業所がそれぞれのあるべきすがたの方向性を策定し、実現に向けた取り組みを開始しています。

各病院は医療の質向上を図りながら、新たな機能への挑戦やサービスの強化に取り組み、地域をリードする役割を果たしています。社会福祉法人溪仁会は2016年度が最終年となった「ビジョン福祉35」のもと、各施設の自律的な運営を促進し、組織基盤の確立を図ってきました。

当グループにとって最大のプロジェクトとなったのが「札幌溪仁会リハビリテーション病院」の開院です。職員の努力や地域の皆さんの支援のおかげで、順調なスタートを切ることができました。まだ数少ない回復期リハビリテーション専門の病院として、その取り組みが関心を集めています。

2017年度は各病院や法人が掲げたあるべきすがたとのギャップを客観的に分析し、それをどのように埋めていくのかを検討する作業に着手しました。社会保障制度改革も念頭に、社会の動向をしっかりと見極め、溪仁会グループならではの独創性の高いサービスをめざすとともに、経営体制の強化や最適化を図っています。

垂直・水平連携を進め 地域包括ケアシステムを描く

札幌溪仁会リハビリテーション病院の開院によって、当グループは病気の予防から急性期・回復期・慢性期・在宅医療までを網羅した医療体制が整いました。高齢者福祉サービス・介護サービスと併せて、複合的な機能を持つグループとしてのスケールメリットを発揮するため、グループ内の垂直連携をさらに進め、シームレスで質の高いサービスの実現に取り組んでいます。

医療や介護が必要になっても住み慣れた地域で暮らし続けられる社会をめざす、という地域包括ケアシステムは、医療や福祉にかかわる者にとって最大のテーマです。グループ内のシームレスなネットワーク構築は、地域包括ケアシステムのモデルにもなると思っています。まずは「溪仁会ファースト」の精神でグループ内の連携を図り、その過程で得た課題解決のノウハウを地域との水平連携に活かし、強化し、地域包括ケアシステムの構築に貢献したいと考えています。

全国で進められているのが、まちづくりと連動した地域包括ケアシステムの構築です。札幌溪仁会リハビリテーション病院は、桑園地区のまちづくりに積極的に参加し、地域包括ケアシステムの中核を担おうとしています。医療や福祉を中心としたまちづくりのモデルとなることを期待しています。

当グループがめざすのは「顔の見える関係」からさらに一歩進めた「考えの見える関係」です。グループ内外において「同盟」ともいべき強固なパートナーシップを結び、同

じ志のもとで地域を支えていく体制を築いていきたいと考えています。

喜びと満足を感じられる 組織であるために

当グループは5,000人近い職員を擁し、医療、保健、福祉にまたがる数多くの事業を展開しています。質の高いサービスを維持し、さらに高みをめざすには、職員の皆さんがやりがいを感じながら働き、成長できる環境を整える必要があります。

優れたものを築けたと自負しているのが人材育成のシステムです。キャリアに応じたきめ細かな研修や組織横断的な研修のほかに、外部研修への参加や専門資格の取得などを積極的に促し、職員一人ひとりが成長することを支援しています。働きながら学び続けることは、仕事のキャリアアップだけでなく、人間形成の手助けにもなるはずで、専門領域を深めることができれば、それが医療人、福祉人としてのやりがいや満足になるでしょう。職員の皆さんにとって、当グループが自己実現を達成し、社会に貢献する喜びを感じられる組織でありたいと思っています。

一方で、強化しなければならないと感じているのが職員の健康づくりです。医療や保健、福祉に携わる者として、病気の予防や健康増進を心がけるのは義務ともいえます。今後は健康管理システムを導入し、健康づくりなどをサポートしていく予定です。職員の健康を守ることも組織の責任と考え、健康経営に取り組んでまいります。

時代や社会のニーズをとらえ 信頼されるCSR経営を

当グループの組織運営の基盤となっているのがCSR経営であり、「『ずーっと。』人と社会を支える」という社会的使命です。質の高いサービスを追求することによって社会から信頼され、多くのニーズを獲得し、さらにそれが経営基盤の安定につながるという好循環を生み出すことで、組織の継続的な発展が可能になります。

CSR経営を支えているのが溪仁会マネジメントシステム(KMS)です。その核となっているISO9001が改訂され、プロセスと同時にアウトカム(成果)も重視されるようになりました。今後は成果や結果の検証も行いながら、CSR経営を推進していく考えです。

社会環境や経済情勢が激動する中、押し寄せる変化の波を乗り越えるには、時代のニーズを的確にとらえ、私たちが柔軟に変わっていく必要があります。そのためにも、ステークホルダーの皆さんの声に耳を傾け、一緒に考えながら新たなサービスを創出していきたいと思っています。

CSR経営によって誠実に事業に取り組み、地域から信頼されることで、溪仁会としてのブランドが高められると考えています。常に挑戦を続け、それぞれの病院や施設が地域の中核になっていくことで、やがては北海道を、そして日本を代表するグループになることをめざしてまいります。





東洋学園大学
グローバル・コミュニケーション学部 教授
日本経営倫理学会 理事
荻野 博司 (おぎの・ひろし)

【プロフィール】 朝日新聞ニューヨーク支局員、論説副主幹などを経て、2014年より東洋学園大学グローバル・コミュニケーション学部教授。同年より苫小牧埠頭株式会社社外監査役。ほかに特定非営利活動法人「日本コーポレート・ガバナンス・ネットワーク」理事、日本経営倫理学会理事。著書に「日米摩擦最前線」(朝日新聞社)、「問われる経営者」(中央経済社)、「英国の企業改革」(共著訳、商事法務研究会)など。

読ませる工夫

溪仁会グループのCSRへの真摯な姿勢が伝わってきました。こうした報告書はともすれば、体裁を整えて作成することだけが目的になりがちです。しかし、2017年版からは「できるだけ多くの人に読んでほしい」「みんなで考えてほしい」という意欲が伝わってきます。

たとえば、ステークホルダーダイアログ。医療や介護の第一線に立たれている5人の若手や中堅の座談会です。職場も職種も異なるメンバーですから、ともすれば当たり障りのない内容にとどまるのですが、大いに触発される話がいくつも盛り込まれていました。

看護部主任の方が紹介された、重度の患者さんのカップラーメンを食べたいとの希望を、カンファレンスを重ねて実現させた体験談に、施設ケア部のユニットリーダーが率直に感動を伝え、理学療法のプロが「患者さんの笑顔のために、まだやれることがある」と気づく。トイレ介助、誤薬の予防など、衆知を集めることの大切さを4ページの記事は伝えています。「チームワークのとれたいい職場だな」と読み手を引っ張り込むものでした。

教科書、参考書

各部門のアクションの紹介のあとに、さりげなく置かれた「Next Step」も興味深く読みました。一定の成果はあげられても、まだまだ足りないことが数多くある。そのことを当事者に示すものです。あわせて施設を利用する方々に向けて、これからも努力を継続することを約束する役割も果たします。

給食の質向上をめざしてコンテストに参加。入賞したうえ、そのひとつが百貨店の惣菜コーナーに並んだ。そんな心弾む報告を読むと、さらに質、量の両面で活動の幅を広げることを期待したくなります。味気ない病院食という先入観を払拭してくれました。

「『ずーっと。』人と社会を支える」グループの決意を確認する記事は随所に見られます。同グループの関係者にとどまらず、全国で医療や介護に取り組んでいる人々にも、格好の教科書、参考書として活用してほしいほどです。

さらなる高みに

生を受け、天寿を全うするまでの長い人生に親身になって寄り添うのがグループの使命とされています。国際規格ISO26000はCSR活動を進めていく上での目安でしかありません。それに魂を入れるのは、グループのメンバー一人ひとりです。

社会の変化は速く、長い時間をかけて培った信頼もあっけなく崩れ去る時代です。このレポートを道しるべに、掲げる理念や活動の中身をいつも再点検し、さらに高めていってほしいものです。

医療・保健・福祉サービスの用語集?

溪仁会グループの活動をよりわかりやすくお伝えするために



【2025年問題】

2025年にはベビーブーム世代(団塊の世代)が75歳以上の後期高齢者となり、高齢者人口が3,500万人に達すると推計されています。それにより医療費と社会保障費が増加するほか、高齢者の住居や介護などたくさん問題が生まれると予測されています。



【(地域)医療連携】

地域にあるさまざまな医療機関が機能や特色を明確にし、役割分担をしながら、互いに協力連携して治療に取り組む医療体制のこと。医療機関は得意分野に専念することができ、患者さんはスムーズに自分の症状に合った医療や質の高い専門医療を受けることができます。

【カンファレンス】

病院内で開かれる症例検討会のこと。担当する症例を持ち寄り、診断や治療方法について幅広い視点から話し合います。医師同士のほか、他職種を交えて行うチームカンファレンスなどもあり、スタッフ間の情報共有の場としても活用されています。

【クリニカルパス】

患者さんが入院してから退院するまでの検査や手術、リハビリテーションなどのスケジュールをまとめた診療計画表のこと。クリティカルパスともいいます。患者さんと医療者側の双方が、意識や情報を共有し、スムーズな治療をめざすためのものです。

【災害派遣医療チーム(DMAT)】

発生から間もない災害急性期(おおむね48時間以内)に、被災地や事故現場に入り医療活動を行える機動性を持つ、専門的な訓練を受けた医療チームです。医師、看護師、事務職員で構成され、Disaster Medical Assistance Teamの頭文字を取ってDMAT(ディーマット)と呼ばれています。

1995年の阪神・淡路大震災で、初期医療体制の遅れから被害が広がったことを教訓とし、まず日本DMATが2005年に発足。現在では高度な救急機能を持つ各医療機関でもDMATが結成されています。

【在宅ケア(医療)】

患者さんのご自宅で提供する医療のこと(自宅には、サービス付き高齢者住宅にお住まいの場合も含まれます)。特に、症状の重い患者さんがご自宅での生活を続けられることを目的に行う、訪問診療や訪問看護などを意味する場合があります。

【産業医】

事業所で労働者が健康・快適な状態で業務ができるよう、専門的な指導と助言を行う医師。産業医となるためには、厚生労働大臣が定める産業医研修の修了者、労働衛生コンサルタント試験合格者など、産業医となるための要件のいずれかをクリアする必要があります。

【シームレスサービス】

「シームレス」とは継ぎ目がない、という意味。溪仁会グループでは、医療、保健、福祉サービスを途切れることなくつなぎ、スムーズに提供しています。これはグループ内にとどまらず、外部の医療機関や福祉施設、行政機関とも連携を深め、スムーズなサービスの提供をめざしています。

【地域包括ケアシステム】

2025年をめどに、高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを最期まで続けられるように構築された、地域の包括的な支援・サービス提供体制。高齢者の尊厳を重要視し、できるだけ自立生活を送れるように支援します。

【地域包括ケア病棟】

高度急性期・急性期の治療が終わった後の診療を担う「ポストアキュート」、自宅や介護施設などにお住まいの方の二次救急や持病の急性増悪(症状の悪化)などの治療に対応する「サブアキュート」両方の機能を兼ね備えた病床群です。在宅復帰に向けたリハビリテーションなども担当し、地域に密着した診療を行います。

【特定健診/特定保健指導】

特定健診は生活習慣病予防のために2008年度から始められた健康診査。この特定健診で危険度が高いと判定されると、特定保健指導によって食生活や運動などの指導を受け、生活習慣の改善をめざすことになります。

【病床】

病院や診療所の、入院者用のベッドのこと。一般病床、療養病床、精神病床、感染症病床、結核病床の5種類に分けられます。また、一般病床・療養病床はその医療機能に応じて、高度急性期病床、急性期病床、回復期病床、慢性期病床という区別をし、地域にどの機能を担う病床がどれだけあるか、都道府県ごとに把握されています。

【ホスピスケア】

末期がんなど、治る見込みがない疾患の患者さんから身体的・精神的な苦痛を取り除き、尊厳を保ちながら最期を迎えることをめざすケア。緩和ケアともいいます。

【看取り】

病気になった人の世話をすること。または亡くなるまでそばで看病し、見守ること。最近は後者の意味で使われることが多く、自宅のほか、病院や福祉施設などで亡くなる方への対応を指す場合もあります。

【メンタルヘルス】

精神(心)の健康、精神保健。生活や仕事の中で抱えるストレスが心の健康に影響し、40人に1人は心の病気を抱えているといわれます。特に職場でのメンタルヘルス対策が推進されています。

【リハビリ】

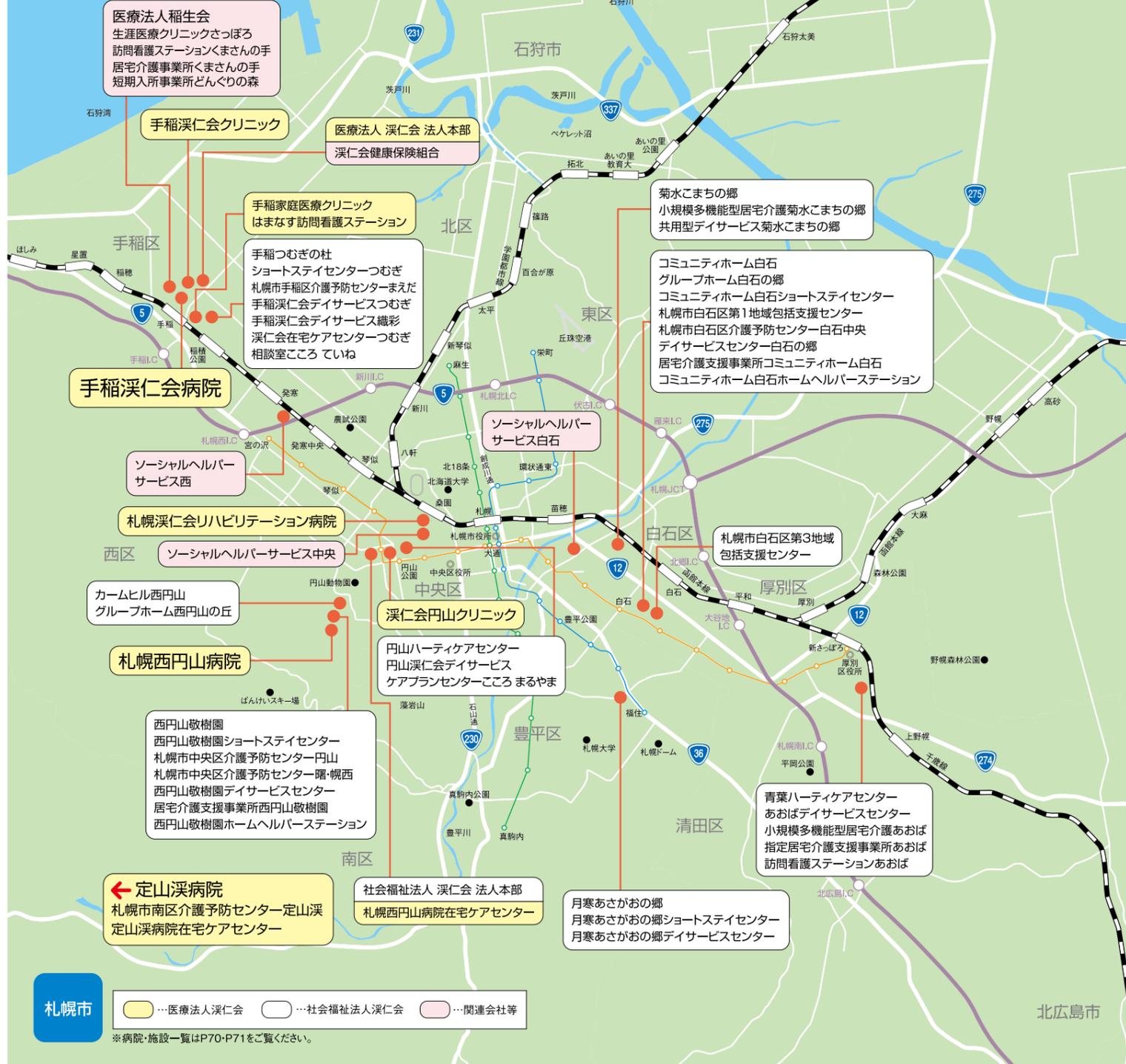
リハビリテーションの略。身体的な機能を回復したり、障がいを軽減したり、症状が悪化しないように維持するための訓練や治療のこと。



地域とともに、医療・保健・福祉を見つめて

溪仁会グループマップ

溪仁会グループは、札幌市を中心に道央・道南・道外(気仙沼市)に事業所を展開しています。
質の高い医療・保健・福祉の提供を通して、地域の皆さまに安心と満足を提供することをめざしています。



溪仁会グループ一覧

治療とケア

最新の医療技術と機器を備え総合医療を提供しています。救急指定医療機関として、24時間・365日あらゆる疾患・外傷の患者さんを受け入れています。

<p>高度急性期・専門医療 手稲溪仁会病院 札幌市手稲区前田1条12丁目1-40 ☎011-681-8111</p>	<p>手稲溪仁会クリニック 札幌市手稲区前田1条12丁目2-15 ☎011-685-3888</p>	<p>手稲家庭医療クリニック 札幌市手稲区前田2条10丁目1-10 ☎011-685-3920</p>
---	---	--

リハビリと療養

看護・介護・リハビリテーションを中心とした医療サービスを提供しています。

<p>回復期医療 札幌溪仁会リハビリテーション病院 札幌市中央区北10条西17丁目36-13 ☎011-640-7012</p>	<p>回復期・慢性期医療 札幌西円山病院 札幌市中央区円山西町4丁目7-25 ☎011-642-4121</p>	<p>慢性期医療 定山溪病院 札幌市南区定山溪温泉西3丁目71 ☎011-598-3323</p>
---	---	--

保健

健康のチェックと病気の早期発見、健康管理、予防に関するサービスを提供しています。

人間ドック・健康診断施設 溪仁会円山クリニック
札幌市中央区大通西26丁目3-16
☎011-611-7766

介護

●**介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)**
日常生活に常時介護が必要で、自宅では介護が困難なお年寄りが入所し、食事・入浴・排せつなどの日常生活の介護や健康管理が受けられます。

<p>西円山敬樹園 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-631-1021</p>	<p>岩内ふれ愛の郷 岩内郡岩内町字野東69-4 ☎0135-62-3131</p>
--	---

●**介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)**
10名が1つの生活単位(ユニット)として暮らし、顔なじみのスタッフが日常生活のお手伝いをします。

<p>月寒あさがおの郷 札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35 ☎011-858-3333</p>	<p>さもべつ喜らめきの郷 虻田郡喜茂別町字伏見272-1 ☎0136-33-2711</p>	<p>手稲つむぎの杜 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-3726</p>
--	--	---

●**地域密着型介護老人福祉施設**
定員29名以下の小規模な介護老人福祉施設で、介護・看護・機能訓練等のサービスを提供するとともに地域や家庭との結びつきを重視した施設です。

<p>菊水こまちの郷 札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64 ☎011-811-8110</p>	<p>るすつ銀河の杜 虻田郡留寿都村字留寿都186-95 ☎0136-46-2811</p>
--	---

社会復帰生活支援

●**介護老人保健施設**
病状の安定期にあり、入院治療をする必要のない方に医療・保健・福祉の幅広いサービスを提供する、介護保険適用の施設です。

<p>コミュニティホーム白石 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-5321</p>	<p>コミュニティホーム八雲 北海道八雲町栄町13-1 ☎0137-65-2000</p>	<p>コミュニティホーム美唄 美唄市東5条南7丁目5-1 ☎0126-66-2001</p>	<p>コミュニティホーム岩内 岩内郡岩内町字野東69-26 ☎0135-62-3800</p>
---	--	---	--

●**軽費老人ホーム(ケアハウス)**
食事の提供、入浴の準備、緊急時の対応、健康管理および相談助言を基本サービスとして、自立の維持ができる施設です。

カムビル西円山
札幌市中央区円山西町4丁目3-21
☎011-640-5500

●**認知症対応型共同生活介護(グループホーム)**
認知症の方が、小規模な生活の場において食事の支度・掃除・洗濯などを共同で行い、家庭的な雰囲気の中で穏やかな生活を過ごせるよう支えます。

<p>グループホーム 白石の郷 札幌市白石区本郷通3丁目南1-16 ☎011-864-5861</p>	<p>グループホーム 西円山の丘 札幌市中央区円山西町4丁目3-21 ☎011-640-2200</p>
--	---

●**短期入所生活介護(ショートステイ)**
事情により介護ができないときに短期間入所していただき、ご家族に代わって食事・入浴等日常生活のお世話をいたします。

<p>西円山敬樹園ショートステイセンター 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-631-1021</p>	<p>コミュニティホーム白石ショートステイセンター 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-5321</p>	<p>おおしまショートステイセンター 宮城県気仙沼市廻館55-2 ☎0226-26-2272</p>
<p>月寒あさがおの郷ショートステイセンター 札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35 ☎011-858-3333</p>	<p>岩内ふれ愛の郷ショートステイセンター 岩内郡岩内町字野東69-4 ☎0135-62-3131</p>	<p>ショートステイセンターつむぎ 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-3726</p>

介護予防在宅支援

●**地域包括支援センター**
高齢者の誰もが、住み慣れた地域でその人らしい尊厳ある生活を継続できるよう支援しています。

<p>札幌市白石区 第1地域包括支援センター 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-4614</p>	<p>岩内町地域包括支援センター 岩内郡岩内町字野東69-26 ☎0135-61-4567</p>	<p>札幌市白石区 第3地域包括支援センター 札幌市白石区本郷通9丁目南3-6 ☎011-860-1611</p>
---	--	--

気仙沼市大島地域包括支援センター
宮城県気仙沼市廻館55-2
☎0226-25-8570

●**介護予防センター・介護予防サロン**
高齢になっても、住み慣れた地域で、その人らしい自立した生活が継続できるように介護予防事業を行っています。

<p>札幌市中央区 介護予防センター円山 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-633-6056</p>	<p>札幌市中央区 介護予防センター曙・幌西 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-633-6055</p>	<p>札幌市白石区 介護予防センター白石中央 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-5535</p>
<p>札幌市南区 介護予防センター定山溪 札幌市南区定山溪温泉西3丁目71 ☎011-598-3311</p>	<p>札幌市手稲区 介護予防センターまえた 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-3141</p>	<p>介護予防サロンりはる 岩内郡岩内町字万代19-7 ☎0135-62-4165</p>

生活支援通所介護

●**通所介護(デイサービス)**
要支援1・2、要介護1～5と認定された40歳以上の方を対象に、食事や入浴、機能訓練や趣味活動などのサービスを提供します。

<p>あおばデイサービスセンター 札幌市厚別区青葉町4丁目10-27 ☎011-893-5000</p>	<p>西円山敬樹園デイサービスセンター 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-640-5522</p>	<p>デイサービスセンターおおしま 宮城県気仙沼市廻館55-2 ☎0226-26-2272</p>
<p>円山溪仁会デイサービス 札幌市中央区北1条西19丁目1-2 ☎011-632-5500</p>	<p>デイサービスセンター白石の郷 札幌市白石区本郷通3丁目南1-16 ☎011-864-3100</p>	<p>月寒あさがおの郷デイサービスセンター 札幌市豊平区月寒西1条11丁目2-35 ☎011-858-3333</p>
<p>手稲溪仁会デイサービスつむぎ 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-2568</p>	<p>デイサービスセンターすまいる 美唄市東4条南5丁目1-4 ☎0126-66-2525</p>	<p>るすつ銀河の杜デイサービスセンター 虻田郡留寿都村留寿都186-18 ☎0136-46-2811</p>

●**小規模多機能型居宅介護**

<p>小規模多機能型居宅介護菊水こまちの郷 札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64 ☎011-811-8110</p>	<p>小規模多機能型居宅介護あおば 札幌市厚別区青葉町4丁目10-27 ☎011-895-5000</p>
---	--

●**認知症対応型通所介護(デイサービス)**

<p>手稲溪仁会デイサービス織彩(しきさい) 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-3328</p>	<p>共用型デイサービス菊水こまちの郷 札幌市白石区菊水上町4条3丁目94-64 ☎011-811-8110</p>
---	---

●**指定居宅介護支援事業所**
介護支援専門員(ケアマネジャー)が、介護保険サービス利用の申請手続きや、ケアプランの作成など介護保険に関するさまざまな相談に応じています。

<p>溪仁会在宅ケアセンターつむぎ 札幌市手稲区前田2条10丁目1-7 ☎011-685-2322</p>	<p>札幌西円山病院在宅ケアセンター 札幌市中央区北3条西28丁目2-1 サンビル5F ☎011-642-5000</p>	<p>定山溪病院在宅ケアセンター 札幌市南区定山溪温泉西3丁目71 ☎011-598-5500</p>
<p>居宅介護支援事業所コミュニティホーム白石 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-2252</p>	<p>居宅介護支援事業所 西円山敬樹園 札幌市中央区円山西町4丁目3-20 ☎011-644-7650</p>	<p>指定居宅介護支援事業所あおば 札幌市厚別区青葉町4丁目10-27 ☎011-893-8761</p>
<p>居宅介護支援事業所すまいる 美唄市東4条南5丁目1-4 ☎0126-66-2525</p>	<p>居宅介護支援事業所やくも 北海道八雲町栄町13-1 ☎0137-65-2121</p>	<p>おおしまハーティケアセンター 宮城県気仙沼市廻館55-2 ☎0226-26-2272</p>
<p>ケアプランセンターさつき 岩内郡岩内町字野東69-26 ☎0135-67-7801</p>	<p>ケアプランセンターこころ まるやま 札幌市中央区北1条西19丁目1-2 ☎011-640-6622</p>	<p>ケアプランセンターこころ ようてい 虻田郡留寿都村留寿都186-18 ☎0136-46-2811</p>

●**札幌市障がい者相談支援事業所・札幌市障がい者住宅入居等支援事業所**
障がいがあっても、住み慣れた地域で自立した生活ができるよう、さまざまな相談に応じています。

相談室こころ ていね
札幌市手稲区前田2条10丁目1-7
☎011-685-2861

●**訪問看護ステーション**
看護師がご自宅に訪問し、主治医の指示に基づき、医療処置・医療機器を必要とされる方の看護を行っています。

<p>はまなす訪問看護ステーション 札幌市手稲区前田2条10丁目1-10 ☎011-684-0118</p>	<p>訪問看護ステーションあおば 札幌市厚別区青葉町4丁目10-27 ☎011-893-5500</p>	<p>訪問看護ステーション岩内 岩内郡岩内町字野東69-26 ☎0135-62-5030</p>
---	---	---

●**訪問介護(ホームヘルパーステーション)**
ご家族で介護を必要とされる方が、快適な生活を過ごせるようご家庭に訪問し、日常生活をサポートします。

<p>西円山敬樹園ホームヘルパーステーション 札幌市中央区円山西町4丁目3-21 ☎011-644-6110</p>	<p>コミュニティホーム白石ホームヘルパーステーション 札幌市白石区本郷通3丁目南1-35 ☎011-864-2008</p>	<p>ホームヘルパーステーションすまいる 美唄市東4条南5丁目1-4 ☎0126-66-2525</p>
<p>ホームヘルパーステーションおおしま 宮城県気仙沼市廻館55-2 ☎0226-26-2272</p>	<p>コミュニティホーム八雲ホームヘルパーステーション 北海道八雲町栄町13-1 ☎0137-65-2122</p>	<p>ケアセンターこころ ようてい 虻田郡喜茂別町字伏見272-1 ☎0136-33-2112</p>
<p>ソーシャルヘルパーサービス白石 札幌市白石区菊水8条2丁目2-6 ☎011-817-7270</p>	<p>ソーシャルヘルパーサービス中央 札幌市中央区北8条西18丁目1-17 ☎011-633-1771</p>	<p>ソーシャルヘルパーサービス西 札幌市西区発寒8条10丁目4-20 ☎011-669-3530</p>

地域医療

公立診療所の指定管理者として地域の医療を支えます。

<p>泊村立茅沼診療所 古宇郡泊村大字茅沼村711-3 ☎0135-75-3651</p>	<p>喜茂別町立クリニック 虻田郡喜茂別町字喜茂別13-3 ☎0136-33-2225</p>
--	--

身体障がい者支援

身体障がいを抱えた方の在宅療養を包括的に支援します。

医療法人 稲生会

- 生涯医療クリニックさつぽろ ☎011-685-2799
- 訪問看護ステーションくまさんの手 ☎011-685-2791
- 居宅介護事業所くまさんの手 ☎011-685-2791
- 短期入所事業所どんぐりの森 ☎011-685-2791

医療法人 溪仁会 法人本部
〒006-0811 札幌市手稲区前田1条12丁目2-30 溪仁会ビル3F / ☎ 011-699-7500(代表)

社会福祉法人 溪仁会 法人本部
〒064-0823 札幌市中央区北3条西28丁目2-1 サンビル5F / ☎ 011-640-6767

「ずーっと。」

人と社会を支える



私たち溪仁会グループは、
社会的責任(CSR)経営を推進します。
高い志と卓越した医療・保健・福祉サービスにより、
「一人ひとりの生涯にわたる安心」と
「地域社会の継続的な安心」を支えます。

ik 溪仁会グループ

〒006-0811 札幌市手稲区前田1条12丁目2番30号 溪仁会ビル3F
TEL 011-699-7500 FAX 011-699-7501

[溪仁会グループホームページ](#)

溪仁会グループ

検索

<http://www.keijinkai.com>